

大東市 歴史的資源活用基本方針

作成業務報告書

大阪府大東市
平成27年10月

目次

• 第一章 与件の確認と作業指針	2
□ 1. 目的 2. 業務内容 3. 作成期日 4. 作業フロー	3
□ 5. 作業に当たっての基本的視座	4
• 第二章 大東市 個別の歴史的資源（コンテンツ）の整理	5
□ 個別歴史的資源（コンテンツ）の整理の視点	6
□ 古代の歴史的資源の整理	7
□ 中世の歴史的資源の整理	8
□ 近世の歴史的資源の整理	10
□ 大東市 個別の歴史的資源（コンテンツ）の整理 まとめ	12
• 第三章 歴史的資源（コンテンツ）の物語化とその評価	13
□ 古代の物語	14
I・曙の記憶 ①旧石器～縄文・弥生期 大東市域に人が住み始めたころの記録	15
II・古代王権との関係 ②古墳時代の大王政権と、この地の古代豪族の関係	17
III・中央の威令 ③律令制の痕跡	19
□ 中世の物語	20
IV・戦の道 ④四條畷の戦いを巡って	21
⑤飯盛城と三好長慶の時代	23
V・集落の信仰をつなぐ道 東高野街道 ⑥山の辺の集落の氏寺・氏神	32
古堤街道 ⑦淵の辺の集落の氏寺・氏神	35
VI・龍間越 祈りの道 ⑧修験道と龍神信仰	38
□ 近世の物語	41
VII・豊かな暮らしへの祈り ⑨治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神	42
⑩神とともに豊作を喜ぶ だんじり	46
VIII・賑わう往来の記憶 ⑪交通の繁栄とおかげまいり、おかげ灯籠	48
⑫野崎まいり	50
IX・豊かな集落の風景 ⑬御領の水郷地域	53
⑭新田開発の遺構・平野屋新田会所跡	56
X・歴史ある野崎観音 ⑮福聚山慈眼寺	59
□ 歴史的資源（コンテンツ）の物語化とその評価と指針 まとめ表	63
• 第四章 15の物語の活用可能性評価のまとめ、注力度評価	64
□ 活用可能性評価と注力度についての考察（古代から中世）	65
• 古代・中世における各物語の現状・判断・指針及びインバウンド評価のまとめ表	66
□ 活用可能性評価と注力度についての考察（近世）	67
• 近世・通期における各物語の現状・判断・指針及びインバウンド評価のまとめ表	69
• 総括 大東市 歴史的資源活用基本方針	70
• 参考資料	72

第一章

与件の確認と作業指針

与件

1. 目的

大東市の歴史的資源について、以下のような視点に沿って、活用基本方針を明示することを目的とする。

- ①重層的な観光資源としてつなぎ合わせ、大東市の魅力を発信する際のベースとして活用する。
- ②今後のまちづくりの方向性を示す指針として活用する。

2. 業務内容

- ①本市に存在する歴史的資源を時代、地域、その他関連する分野(例:建物、文化、河川、街道等)により整理する。
- ②整理した歴史的資源を重層的につなぎ合わせ、本市の魅力を発信するための観光資源として、或いは街づくりの核として活用するための基本方針を明示する。

3. 作成期日

2015年10月

作業指針

4. 作業フロー

1. 時代、地域、カテゴリー、内容、特長の特性に従って主要な個別資源を整理。
2. テーマに従って、個別資源を複数の物語に括る(エディション)。
3. 括った個別資源を連動させて、コンテンツとしての価値を高められる物語を構築する。
4. 物語を活かしたうえで、利用活性化の方向を明示する(イン&アウトバウンド、インナーへの利用方向)。
5. 物語がより活かされるように、各個別資源の望むべき整備の方向性を示す。
6. 活用可能性を対し、イン&アウトバウンド、インナーへの効果が高さを基準にプライオリティを評価する。
場合によっては、物語を連動させ、より大きな物語を構築し、個別の資源価値ではなく、物語の総合力でより高い魅力付けを図る。

5、業務に当たっての基本的視座

◆「歴史的資源の利用」とは、基本的には文化レベルの向上に資する利用である。

- そもそもすべての歴史的資源は、学校教育、或いは生涯学習において、市民の方々にわがまちの歴史を知って頂くことで、知識教養を高め、文化レベルの向上に資することが第一の存在意義である。
- 従って、ここに取り上げた大東市のすべての歴史的資源は、市民の知識教養、文化レベルの向上において同様に重要な価値を有する。

◆但し観光資源やシビックプライドの資源としての活用も考え、評価判断を加えて、活用できる歴史的資源を絞り込む。

- 大東市には、多様な、多数の歴史的資源がある。但し当然だが、中には、まつわる話が非常に深く多様に紡げ、一般の人々の想像を描き立たせるものもあれば、古いというだけでそれ以上の展開が見込めないものもある。
- ここでは、歴史的資源を、市民生活の実利やよこびに、より直結させるため、以下の3点を目的と考える。
 - ①インバウンド(=観光資産。外部から人を呼び込む)
 - ②アウトバウンド(=市外からの大東ブランドへの需要。市内生産品に付加して販売に寄与)
 - ③インナーモラル(=シビックプライド(市民であることの誇り)が高まり、いい街だと思ふこと。定住を促進)
- 歴史的資源の価値そのものに優劣を付けているわけではない。あくまでも「観光、ブランド資源、シビックプライドの資源」としての評価であり、どの資産に絞り込むのかという、そぎ落とすための評価である。

*注) インバウンドに効果があればアウトバウンドにも効果がある。従って、この後の論は、インバウンドへの効果と、シビックプライドへの効果の2軸で考えて行く。

◆既に大東市の資料で紹介されている歴史的資源を組み直すことで、意味づけ、魅力付けを高めることを図る。

- 大東市内の歴史的資源は、すでに多様な形で集積され学術的資料として活字化されているばかりでなく、既に多くの観光コースや地域遺産の紹介、生涯学習の資料が作られている
- それらの資料では価値のある歴史的資源が既に数多く紹介されている。
- 既に主要な歴史的資源として拾い上げ、地域や特性別に、(見学コースやテーマ的に)纏められている先達の事績を基にして、それを整理し、より先鋭化させ、観光資源、或いは一般市民のシビックプライド形成に資するような編集と、輝かせる整備、活性化の方針を固めることに注力する。

第二章

大東市 個別の歴史的資源(コンテンツ)の整理

この章での作業

- 1.時代、地域、カテゴリー、内容、特長の特性に従って主要な個別資源を整理。
- 2.テーマに従って、個別資源を複数の物語に括る(エディション)。
3. 括った個別資源を連動させて、コンテンツとしての価値を高められる物語を構築する。
4. 物語を活かしたうえで、利用活性化の方向を明示する(イン&アウトバウンド、インナーへの利用方向)。
5. 物語がより活かされるように、各個別資源の望むべき整備の方向性を示す。
6. 活用可能性に対し、イン&アウトバウンド、インナーへの効果が高さを基準にプライオリティを評価する。場合によっては、物語を連動させ、より大きな物語を構築し、個別の資源価値ではなく、物語の総合力でより高い魅力付けを図る。

個別の歴史的資源(コンテンツ)の整理の視点

- 大東市は、その地勢的特徴において、大きな歴史的変曲点を持ち、時代ごとに全く違った容貌を見せる特異な地域である。
- ①古代には現大東市域の中で居住地等になっている平野部の大部分は、河内湾、河内湖といった水域であった。
- ②中世に至ると海面は大きく後退したものの、深野池と、大和川が作るデルタの広大な湿地など人が暮らすには簡単ではない地域が広く残り、人は生駒山地の西麓と、水域の岸边、三角州や水面に浮かぶいくつかの島々の中で安定した土地に集落を作り、そこに拠って水を利用しつつ、水害と闘いながら生活するほかなかったと思われる。
- ③近世以降の大東市域は大和川の付け替えと、新田開発によってその状況が大きく変わった。人の利用を拒んだ池や湿地は、豊かな農村に変わり、天下の台所大坂の近郊生産地として豊かな発展がはじまり現代に至っている。
- こうして考えると、大東市の歴史とは「水と闘い、水を治め、水を利する」ことそのものの歴史だっただろう。
- その中で、後半部の、水を治め、豊かな農村となった時代にももちろんこの地域を語るにふさわしいテーマがいくつもあるが、そればかりでなく、前半部の、市域の中心部に満々と水をたたえ、人々がその周辺で生きた時代にも、それが故にこの地域を特徴づける歴史的なテーマがちりばめられている。
- そこでここではまず、大きな三つの時代区分を設定し、それぞれの中で幾つかのテーマを取り出すことから始めた。
- 各個別の歴史的資源(コンテンツ)の主なものを見渡せる既存資料として、①大東市内文化財地図の「歴史散歩道大東」(大東市教育委員会:平成八年)と②「大東市文化財マップ」(大東市教育委員会:平成二十一年)に記載された80種に及ぶ個別文化財を基本に、それらを整理していく方法を採用した。

注)

- 本来的に大東エリアの歴史的資源と言え、明治期以降、近代に入ってからこのエリアが成長してきた、近現代におけるコンテンツやエピソードも含まれることは明らかである。
- ただ、近現代は、土地利用のあり方も、古堤街道や、河内街道などの道路輸送や舟運、鉄道輸送などの交通手段、輸送手段は勿論大きく変化してきたものの、その方向性は基本的に近世で形成された、「生産地帯としての発展の方向性、生産性の効率化、高速大量化」であり、このエリアの近代・現代に発展する歴史は、近世との連続性を持った発展形と捉えられる。
- 従って、今回は地形そのものが変わり大きく表情を変えた時代区分を基本に、近世以降を現代まで一くりにして、三つに単純化し、そのベースとなった近世のエピソードを取り上げた。勿論今後これに近現代のエピソードを加えることも検討できるだろう。

古代の歴史的資源の整理

- ◆大東市の古代は、早くからこの土地に人が住み続けた、暮らしやすい土地＝「古代から開けた水辺の邑」という1つの大テーマで語れる。
- ◆テーマに区分すると①旧石器～縄文、弥生期②古墳時代③奈良時代の3区分で考えることができる。
- ◆それぞれのコンテンツは学術的に貴重な遺物や遺跡から、地名しか証拠のないものまで多様である。
- ◆それぞれ「曙の記憶」「古代王権との関係」「中央の威令」とテーマ設定し価値アップの可能性を検討した。

大東市 古代の歴史的資源コンテンツとテーマの整理

時代区分	①古代		
大テーマ	古代から開けた水辺の邑		
テーマ	I・曙の記憶	II・古代王権との関係	III・中央の威令
物語 (クラスター)	①旧石器～弥生期 大東市域に人が 住み始めたころの 記録	②古墳時代の 大王政権と、 この地の 古代豪族の関係	③律令制の痕跡
コンテンツ	旧石器時代 中垣内遺跡 ナイフ形石器	堂山古墳群 出土した遺物 ・武具類 ・甲冑 ・馬具	条里制の痕跡を 残す地名 ・四条 ・北条 ・西大寺領渚浜荘 (現在の中垣内)
	縄文時代 宮谷古墳群 有舌尖頭器		
	縄文時代 北新町遺跡 緒締形勾玉		
	弥生時代 野崎遺跡 弥生式短頸 大型壺形土器		

テーマ

【曙の記憶】大東市には旧石器時代、縄文期から弥生時代に掛けての、考古学的な歴史的資源は数多い。

- 例えば、中垣内遺跡から出土した、旧石器時代のナイフ形石器や北新町遺跡から出土した勾玉などのような学術的に貴重で価値が高い出土資料も数多くみられる。
- この地域は、人々が石器を使い狩猟で生きた時代から、豊かな山海の幸に恵まれ生活できた地域だったことがうかがえる。
- 大東市域を若干外れるが、神武東征における河内上陸地点や、それに先立つ交野の磐舟神社の天の磐舟伝説など、豊富な神代の伝説もある。この地域が古代から人が暮らし往来する所として意識された証拠だろう。

【古代王権との関係】更に時代がさがると、特筆すべきものとして5世紀前半から作られたと考えられている堂山古墳群があり、北新町遺跡からは古墳時代の戸口装置が出土している。

- 堂山古墳からはその時代の大王政権と考えられる古市古墳群を形成した勢力との関係をうかがわせる大型の墳丘と武具などの豊かな出土品が、大東市近辺にあった有力な勢力の存在についての想像をたくましくさせる。
- 但し残念ながら、大東市域内には日本書紀・古事記や伝承にも有力な豪族の存在は伺えず、物語の材料に乏しいようだ。

【中央の威令】北条、四条など、古代の条里制の名残としての地名が残り、大宝律令に従って中央と繋がった古代からの集落が存在した歴史ある土地であることを示している。

- 奈良西大寺の所領として、渚浜荘の記載があり、須波麻神社のある現在の中垣内にあったと考えられている。

中世の歴史的資源の整理

- ◆中世の大東市域は経糸の東高野街道と横糸の古堤街道で骨格が構成されると思われる。
- ◆東高野街道の性格を戦の道として見ると、日本史上有名な2つのエポックが認められる。
- ◆その一つが四條畷の戦いだ、大東市域に史跡となるものがほとんどないことが難点。
- ◆もう一つの飯盛城と三好長慶の時代は、他の複数のコンテンツと統合し物語を深める可能性を検討する。
- ◆残されている社寺仏閣の性格から、集落を繋ぐ道の視点で見た東高野、古堤街道それぞれの物語を導く。
- ◆龍間には独特の性格を持つ社寺、石造物が残されており、他の集落と異なった価値の向上を検討する。

大東市 中世の歴史的資源コンテンツとテーマの整理

時代区分	②中世						
大テーマ	東高野街道(経糸)				古堤街道(横糸)		
テーマ	IV・戦の道		V・集落の信仰をつなぐ道			VI・龍間越 祈りの道	
物語	④四條畷の戦いを巡って	⑤飯盛城と三好長慶の時代	⑥山の辺の集落の氏寺・氏神		⑦淵の辺の集落の氏寺・氏神	⑧修験道と龍神信仰	
コンテンツ	ハラキリ・古戦田に残る地名	飯盛城跡	北條神社 (天神・八幡)	専應寺	勿入淵跡	龍光寺	旧龍間寺本尊 千手観音
	小楠公御旅所跡	三好長慶	大谷神社 (須瀆大明神)	石造九重層塔	善宗寺	龍間不動	一石六地藏
	楠木正行公銅像	野崎城跡	寶塔神社	十念寺 (楠鎮魂)	須波麻神社 (中垣内)	役行者 飛翔像	一石十三仏
		三箇城跡	南條神社	十林寺 (蓮光寺縁起)	素戔鳴神社	龍間神社	延徳銘地藏
		三箇キリシタン			聖徳太子像 (太子田)	役の行者像 (鳳字寺前)	行者堂(龍間)
		永禄銘地藏			水野北野神社	大峰堂(赤井)	行者堂(灰塚)
					本念寺		
					正覚寺		
				本妙寺			

大テーマ

【経糸の東高野、横糸の古堤街道】古代の河内湖は、平安時代以降さらに大和川の運ぶ土砂で水面が減少し、広見池、さらには深野(ふこの)池、新開池という二つの大きな池となっていた。

- 平安時代には、大東市地域には後三年の役後、源義家はその戦勝を祈念した石清水八幡に荘園を寄進したとされる御供田の集落や、清少納言が枕草子で「淵は・・」として取り上げるほど淵の代表として有名だった勿入淵(ないりそのふち)など、いくつかのコンテンツが存在する。
- 更に中世に至ると、太い物語を紡ぐ経糸と緯糸として、人々が行きかい、物資や文化を運んだ二つの街道が浮かび上がる。広大な水域を避け、生駒の山裾を抜け京都と高野山をつなぐ東高野(ひがしこうや)街道と、大和川や広見池の北岸に沿ったり、池を渡りながら進み、難波と奈良を繋ぎ、生駒山を越える道は、中垣内越(なかがいとごえ)、或いは龍間(たつま)越と呼ばれ、奈良街道の本道である闇越(くらがりごえ)のバイパスとして多くの人が利用した古堤街道の二街道である。
- 東高野街道と古堤街道の交差する寺川や中垣内周辺は、交通の要衝だったと思われ、道標が数多く残っている。
- 人々が頻繁に行きかうようになると、その周辺には集落も増える。街道は集落を繋ぐ生活の道でもあった。

テーマ

【戦のみち】中世の東高野街道は戦の道であった。武士が台頭して後、京都にある政権を巡る戦いの中で、京都から南に打って出るにせよ、南から京都に迫るにせよ、戦闘集団を動かせるルートは限られ、なかでも最も狭窄部となる深野池東岸の野崎周辺は戦略上重要なエリアとなり、二度、歴史に名を残している。

- 一度は室町前期、南朝の楠木正行が足利政権の高師直と戦った四條畷の戦いであり、もう一つが室町末期、管領や守護大名を抑え足利将軍を傀儡として覇権を握った三好長慶が天下を治め畿内を見渡した飯盛城が存在する場所としてである。

【集落の信仰を繋ぐ道】東高野街道は真言宗の京都本山である教王護国寺(東寺)と総本山である高野山金剛峯寺を結ぶ宗教的な結線であることが名前の由来だが、実際には平安時代初期からの南海道の後身と考えられており、生駒西麓の山の辺の道として古くからあった。その道すがらには、いくつかの集落が古くからあり、そこには集落の守り神、菩提寺への素朴な信仰があったと思われ、その痕跡を残している。

- 続いて古堤街道を見ると、ここにも新開池、深野池の淵に成立した集落に、古くから氏神として或いは村の寺として信仰を深めてきた古社寺が点在する。

【龍間越 祈りの道】さらに中垣内周辺から龍間に掛けての、古堤街道龍間越えにも、同様に古くからの社寺が点在するが、その信仰のあり方に特長がある。

- ここでは龍神信仰、或いは古堤街道までも広く分布する役行者信仰とも言うべき修験道の信仰が色濃く見えてくる。

近世の歴史的資源の整理

- ◆近世全体は大東市域の豊かな暮らしへの歩みがテーマ。そこに信仰的な側面が絡み、歴史的資源となっている。
- ◆発展した大東市域の風景をテーマに、豊かな農村風景としての水郷の物語と、発展のキーファクターである新田遺構の二つについて、その魅力、性格を考察し、物語と価値向上可能性を検討する。
- ◆また、新田開発までの社寺、あるいは新田開発以降の社寺の性格を見るに加えて、だんじりという行事もその性格を考察し、それらが持ち得る物語と価値向上可能性を検討する。
- ◆さらに人々が豊かになるにつけ、頻繁になった往来という側面をテーマに、おかげまいりと野崎まいりという二つの事績から紡がれる物語と、価値向上可能性を検討する。

大東市 近世の歴史的資源コンテンツとテーマの整理

時代区分	③近世									
大テーマ	豊かな暮らしへの歩み									
テーマ	VII・豊かな暮らしへの祈り					VIII・賑わう往来の記憶		IX・豊かな集落の風景		
物語	⑨治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神			⑩神々とともに豊作を喜ぶ ＝だんじり		⑪交通の繁栄と おかげまいり おかげ灯籠	⑫野崎まいり	⑬水郷	⑭新田開発 の遺構	
コンテンツ	三箇菅原神社	勝福寺 (五百羅漢)	御供田安楽寺	北條神社	山王宮神社	灰塚おかげ灯籠	観音浜の碑	旧家群	平野屋新田 会所跡	
	諸福菅原神社	本伝寺	坐摩神社	諸福菅原神社	水野北野神社	中垣内 おかげ灯籠	専應寺	田舟乗船	平野屋新田会所跡 周辺に残る樋門	
	御領菅原神社	西福寺	太子田大神社	深野北 菅原神社	赤井北野神社	本伝寺 おかげ灯籠	住吉神社	段蔵	深野新田会所跡	
	霧（おかみ） 神社	本念寺	両皇大神宮	素菱鳴神社	大谷神社	など おかげ灯籠8基	南條神社	辻本家住宅	井路・樋門	
	水神宮	覚順寺	住吉神社	坐摩神社	御領菅原神社	道標 多数	お染久松 (比翼塚)	御領水路		
	水野北野神社	常宗寺		御供田 八幡神社	須波麻神社	角の堂名碑など	無縁経奉納 (縁日)			
	御供田 八幡神社			南條神社	太子田大神社					
				寶塔神社	龍間神社					
				三箇菅原神社						

大テーマ

【豊かな暮らしへの歩み】大東の近世史は(もちろん、水との熾烈な闘いは残ったにせよ)ある意味、平和な農村として豊かに発展する、庶民・農民が作ってきた歴史である。

- 特にその中でもこの地域の一大エポックは、大和川の付け替えに伴う深野池の新田開発である。
- 大和川付け替えそのものは、大東市域より南部の、現在の柏原、藤井寺、八尾、松原、堺、大阪といった各市で行われた工事であるが、その工事計画を立て申請を行ったのは、大和川の氾濫で苦しむ中河内の庄屋、中甚兵衛である。川の付け替えは、水害の低減と新田開発という莫大な恩恵をもたらし、現在の大東市に与えた影響は計り知れない。
- まさに画期的な事業であり、以前と以後では、土地の風景も豊かさも一変してしまう。ある意味、現在の大東市の礎が作られたのはこの時とも、大東市民にとって直接アイデンティティを感じられる歴史はここから始まるとも言え、その意味で大東市にとって非常に重要な出来事であった。

テーマ

【豊かな集落の風景】中世から続く集落は、江戸期に入って戦が止み、やっと安定した発展が望めるようになった。

- 古代や中世の事物より新しいとはいえ、それでも300年前の出来事であり、豊かな田園風景は、ここ50年程度でどんどん消えていった。現在、新田開発当時の面影を彷彿とさせるものは、ほとんど残っていない。
- 平野屋新田会所跡は、大東市の繁栄の基である新田の存在を直接示す(ほぼ唯一の)記念碑となるものである。
- 今に残る御領の水郷地帯や、大きな旧家なども、近世の大東市域が作りだした豊かな田園風景の貴重な遺構である。

【豊かな暮らしへの祈り】新田で発展する集落の、守り神や菩提寺となる多くの社寺が建立されたり装いを一新した時代でもある。

- 戦で命を落とすことはなくなったが、江戸期に入っても大和川の氾濫、水害の恐怖はあり、新田開発の後も、天候不順、水不足は恐ろしかったに違いない。天神信仰や民衆に浸透してきた往生を願い念仏を唱える浄土真宗、日蓮宗といった宗教に帰依することで、安穏な暮らしと来世を願う気持ちは変わらなかっただろう。
- 集落では、秋の実りの時を迎えると、だんじりを曳き出して神への感謝と豊作を祝った。まさに、全郷挙げての祭りであり、豊かな田園とその実り、経済力がこの地域にあってこそ残せた行事であり、治水と新田のたまものである。

【旅する人々の往来】また、大和川付け替えで古堤街道は安定した陸路となり、人の往来でにぎわうだけでなく、以前の池や川が水路として整備され、舟運で物や人の移動が容易になった。

- 江戸時代に庶民の娯楽として流行し、今でも盛んな野崎まいり、おかげ参りの爆発的熱狂を記念したおかげ灯籠に、近世の大東における人々の往来が盛んな様子が見えてくる。

大東市 個別の歴史的資源(コンテンツ)の整理 まとめ

- 三つの時代区分に、中世のみこのエリアの経糸と横糸を形成する道で2つに分け、それぞれのテーマを設定。
- 古代は、弥生まで、古墳期、奈良期の3時代区分でテーマを設定し、それぞれの物語を導いた。
- 中世は道の性格として、戦の道、集落の道を設定。戦の道のエポックや道別に物語を導いた。龍間は別個にした。
- 近世は平和と新田開発で発展する大東市域の物語として、信仰と往来、景観の三つの歴史的資源となるテーマを導いた。
- 野崎観音は、一時代のエポックではなく、複数の時代に渡り登場する強力なコンテンツ。別個に一つの物語として検討する。

時代区分	①古代			②中世				③近世											
大テーマ	古代から開けた水辺の邑			東高野街道(経糸)				古堤街道(横糸)		豊かな暮らしへの歩み									
テーマ	I・曙の記憶	II・古代王権との関係	III・中央の威令	IV・戦の道		V・集落の信仰をつなぐ道		VI・龍間越祈りの道		VII・豊かな暮らしへの祈り				VIII・賑わう往来の記憶		IX・豊かな集落の風景			
物語	①旧石器～弥生期大東市域に人が住み始めたころの記録	②古墳時代の大王政権と、この地の古代豪族の関係	③律令制の痕跡	④四條畷の戦いを巡って	⑤飯盛城と三好長慶の時代	⑥山の辺の集落の氏寺・氏神	⑦淵の辺の集落の氏寺・氏神	⑧修験道と龍神信仰	⑨治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神				⑩神々ともに豊作を喜ぶ＝だんじり		⑪交通の繁栄とおかげまいりおかげ灯籠	⑫野崎まいり	⑬水郷	⑭新田開発の遺構	
コンテンツ	旧石器時代 中垣内遺跡 ナイフ形石器	堂山古墳群 出土した遺物 ・武器類 ・甲冑 ・馬具	条里制の痕跡を残す地名 ・四条 ・北条 ・西大寺領 渚浜荘 (現中垣内)	ハラキリ古戦場に 残る地名 小楠公 御旅所跡	飯盛城跡 三好長慶	北條神社 (天神・八幡) 大谷神社 (須瀆大明神)	専應寺 石造九重層塔	勿入淵跡 善宗寺	龍光寺 龍間不動	旧龍間寺 本尊 千手観音 一石 六地藏	三箇菅原 神社 諸福菅原 神社	勝福寺 (五百羅漢) 本伝寺	御供田 安楽寺 坐摩神社	北條神社 山王宮神社	灰塚 おかげ灯籠	観音浜 の碑 専應寺	旧家群 田舟乗船	平野屋新田 会所跡 平野屋新田 会所跡周辺 に残る樋門	
	縄文時代 宮谷古墳群 有舌尖頭器	北新町遺跡 木製戸口装置 一式		楠木正行公 銅像	野崎城跡	寶塔神社 十念寺 (楠鎮魂)	須波麻 神社 (中垣内)	役行者 飛翔像	一石 十三仏	御領菅原 神社	西福寺	太子田 大神社	深野北 菅原神社 赤井北野 神社	中垣内 おかげ灯籠	本伝寺 おかげ灯籠	住吉神社	段蔵	深野新田 会所跡	
	縄文時代 北新町遺跡 緒締形勾玉				三箇城跡	南條神社 十林寺 (蓮光寺縁起)	素戔鳴 神社	龍間神社	延徳銘 地藏	龍(おかみ) 神社	本念寺	両皇大神宮	素戔鳴 神社 大谷神社	など おかげ灯籠 8基	南條神社	辻本家 住宅	井路・樋門		
	弥生時代 野崎遺跡				三箇 キリシタン		聖徳太子 像 (太子田)	役行者像 (鳳字寺前)	行者堂 (龍間)	水神宮	覚順寺	住吉神社	坐摩神社	御領菅原 神社	道標 多数	お染久松 (比翼塚)	御領水路		
	弥生式短頸 大型壺形土器				永祿銘地藏		永野北野 神社	大峰堂 (赤井)	行者堂 (灰塚)	水野北野 神社	常宗寺		御供田 八幡神社	南條神社 太子田 大神社	角の堂名碑 など	無縁経奉納 (縁日)			
⑮福聚止の碑 野崎観音	<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px;"> 十一面観音 (野崎観音) 長谷観音と同木 行基が開基 </div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px;"> (野崎観音) 阿波三好の 長谷観音と同 木 </div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px;"> 江口の君 </div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px;"> 石造九重層塔 </div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px;"> 野崎 不動尊 神変 大菩薩 役行者像 </div> <div style="text-align: center; flex-grow: 1;"> <h2>野崎観音</h2> </div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px;"> 十一面観音 (野崎観音) 開帳 </div> </div>																		

第三章

歴史的資源(コンテンツ)の物語化とその評価

先に示した15の物語を評価し、その重要性と今後の整備における方向性について評価を加える。

1. 1.時代、地域、カテゴリー、内容、特長の特性に従って主要な個別資源を整理。
2. テーマに従って、個別資源を複数の物語に括る(エディション)。

この章での作業

3. 括った個別資源を連動させて、コンテンツとしての価値を高められる物語を構築する。
 4. 物語を活かして、利用活性化の方向を明示する(イン&アウトバウンド、インナーへの利用方向)。
 5. 物語がより活かされるように、各個別資源の望むべき整備の方向性を示す。
-
6. 活用可能性に対し、イン&アウトバウンド、インナーへの効果が高さを基準にプライオリティを評価する。場合によっては、物語を連動させ、より大きな物語を構築し、個別の資源価値ではなく、物語の総合力で、より高い魅力付けを図る。

①古代の物語

I・曙の記憶 ①旧石器～縄文・弥生期 大東市域に人が住み始めたころの記録

- 大東市は、多くの古代遺物の出土遺跡と、発掘された出土品がある。主だったものを挙げると

- ✓旧石器時代 中垣内遺跡 ナイフ形石器
- ✓縄文時代 宮谷古墳群 有舌尖頭器
- ✓〃 北新町遺跡 緒締形勾玉
- ✓弥生時代 野崎遺跡 弥生式短頸大型壺形土器
- ✓五世紀後半 北新町遺跡 戸口装置一式
- ✓五世紀 堂山1号群 甲冑・馬具など

などがある、



緒締形勾玉



弥生式短頸大型壺形土器

- これらの遺物の出土地、遺跡の位置を見ても、このエリアが、氷河期と呼ばれる厳しい寒気が地球を覆い、現在の瀬戸内海や大阪湾に海水もなく、日本列島が大陸と地続きだった旧石器時代から、気候が温暖になり、地球を覆っていた氷が解けて海面が上昇した縄文期のいわゆる縄文海進、海退の影響で、生駒山麓まで海が迫りまた引いて、弥生時代には、河内湖と呼ばれる汽水湖が残るといった、地勢のダイナミックな変化の影響を受けてきたことが読み取れる。
- 大東市域では、弥生期に入ると水辺に沿った地域で、人々は集落を作り、農耕を始めた遺跡も残っている。
- 生駒山麓の中垣内から北条、北新町に掛けて、旧石器時代から弥生時代まで、様々な時代の遺物が出土している。
- 狩猟や海の幸、山の幸の採取、更には農耕と、安定して人が暮らしていける環境を提供し続けたエリアであった。
- 残念ながら、これらそれぞれの歴史的資源は、その時代に、この地に人が暮らした証ではあっても、古代史のエポックとして見直すと、日本のいたるところにある旧石器～縄文～弥生の遺跡にもみられるものが多く、大東市の古代遺跡としてキャラクターの立った物語を描くことは難しい。
- それでも大地があり、海となり、それが引いて行く太古を通じて人が住み続けてきた豊かな土地であったことは、この地域に今住む人々に於いても重要な大東市域の歴史といえるだろう。

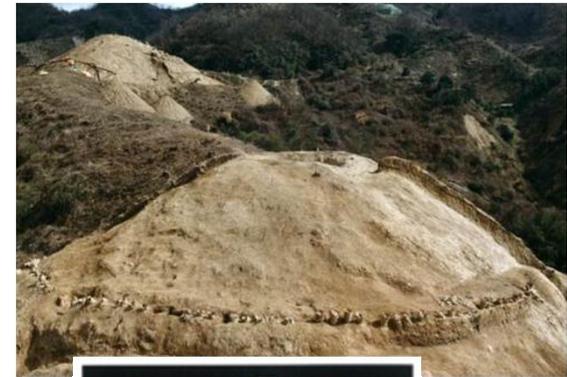
まとめ

- ◆大東市域では河内湾湖の岸边や島等の陸部の遺跡から、多くの遺物が出土している。
- ◆先史時代の早期から、人の痕跡があり、住みやすい土地であったことが伺われる。
- ◆但し残念ながら、それぞれの歴史的資源は、古代史上の遺物としてはスタンダードなもので、一般的な古代の暮らしは描けても、大東市域の古代という個性的な物語を描くのは難しい。
- ◆それでも大地があり、海となり、それが引いて行く太古を通じて人が住み続けてきた豊かな土地であったことは、この地域に今住む人々に於いても重要な大東市域の歴史といえるだろう。
- ◆現在大東市に住む市民に対し、大東市域が古代から豊かな土地であったことを知ってもらえるような生涯学習的な利用の為の整備を進めて行くことを考えたい。

Ⅱ・古代王権との関係

②古墳時代の大王政権と、この地の古代豪族の関係

- 河内南部に巨大な古墳を築いた王権勢力が現れた時代、大東市域の首長墓と考えられる堂山1号墳が造られた。
- 堂山1号墳からは百舌鳥・古市古墳群を形成した勢力との関係を伺わせる武器などの豊かな埋納品が出土した
- 葬られた一族についての想像をたくましくさせるが、大東市のエリアだけで考えると堂山1号墳の被葬者は見えない。
- 地域を若干広げて、この時期の「北河内」に存在した、百舌鳥・古市の勢力に関わりの深い勢力と考えると、少し違ってくる。
- 百舌鳥・古市の王権の始祖は日本書紀や古事記で言う応神天皇に当るが、その記紀には朝鮮半島から学者であった王仁を招いたり、秦氏の祖とされる弓月君（ゆづきのきみ）が「人夫百二十県を率いて帰化」したことや「倭漢直（やまとのあやのあた）の祖である阿知使主（あちのおみ）とその子の都加使主（つかのおみ）が、党類（ともがら）十七県を率いて来帰」したことが記述されている。
- このように五世紀の初めからは、朝鮮より渡来して南河内の古市郡に居住した西文氏（かわちのふみうじ）らのように活発な渡来人の移住があり、とりわけ北河内では、四條畷市で出土した馬飼部の遺跡が物語るように、馬飼いの技術やそれに付随する様々な技能が広がっていた。
- その時代の北河内では、淀川、大和川という2つの水路を使って、都にも、また海から大陸にも繋がる事が容易であったために、渡来系の大規模な職能集団の移住、植民化が進んでいたと思われる。



堂山1号墳



甲冑 三角板革綴衝角付冑、三角板革綴短甲
(大阪府指定文化財)



部屋北遺跡・馬埋納土坑遺骨（レプリカ） 四條畷市

Ⅱ・古代王権との関係

②古墳時代の大王政権と、この地の古代豪族の関係

- つまり北河内は、当時から渡来人の活躍が目立つ最先端技術集積エリアであった。
- だとすると、この時代にこのエリアに堂山古墳群を作ったのは、渡来人そのものとは考えにくいとしても、渡来人との強い関係を想定しなければならず、渡来人の技術を大王家に提供させるコーディネーター的な豪族だったかもしれない。
- 例えば王権側の渡来人を統べる有力氏族で、大和川流域に強い影響力があった人物などは候補として考えられる。
- 出土した中央政権との強い関係を示す武具類は、かなり完全に近い形で、多様なものが出土した。
- 考古学的には堂山古墳群は、中央に服属し良い関係がある一族の古墳と言う証左に留まるが、これが、河内王朝以降たびたび登場する西文氏や東漢氏（やまとのあやうじ）、秦氏などの渡来系氏族を統括した人物の墓だとすると枚方や四條畷など周囲の遺跡と連携して壮大な古代ロマン物語を匂わせる価値づけが可能になるかもしれない。
- そのためには、学術的に（肯定は困難にしても決定的に）否定されないような考古学的、文献史的な精緻化とともに、研究者と仮説を共有しての研究広報、周囲のエリアと連携等による盛り上げが望まれる。

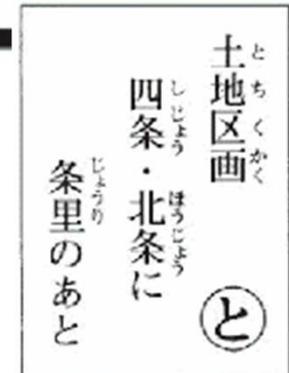
まとめ

- ◆ 堂山 1 号墳は、その造成年代や場所、豊富な埋納物から埋葬者は河内王権に繋がるとともに、馬飼野などに繋がる渡来人との関係も深い、王朝の渡来人コーディネーター的な人物だったかもしれない。
- ◆ このことは5世紀前半の大東市域が、有力豪族と渡来人が活躍する最先端地域であった可能性に繋がる。
- ◆ 大東市のみならず、枚方、四條畷など北河内の他地域の渡来人遺跡と連携することで、古代史の中で堂山古墳群の価値が、大きく向上する可能性がある。
- ◆ 他地域との連携で、渡来系氏族、有力豪族と堂山古墳の関係を、ある程度精緻化するアプローチが望まれる。

Ⅲ・中央の威令 ③律令制の痕跡

- 条里制は奈良、天平時代に成立した大宝律令で定められた班田収受、公地公民といった制度を区割りに反映させたものと言われてきた。
- ただし最近では条里制が、墾田永代私財法によって広がった墾田の記述のためにもまれたという説も有力である。
- どちらにしても成立は奈良時代で、大東市のエリアは比較的早くから中央政権の威令が行き渡っていた地域だったと思われる。
- 奈良時代の大東市域は讃良（ささら）郡、茨田（まつた）郡に属するが、讃良郡では、河内湖と生駒山山麓に挟まれた狭いエリアしか住み易く、農作が可能な土地がなかった。
- その狭いエリアにある北条、四条は条里制の痕跡をとどめた地名である。
- 確かに奈良時代にこのあたりが開発、開墾されたことを記憶にとどめる地名であるが、大東市域で、具体的なこの時代を特徴づける文化財は殆ど見えてこない。
- また裳羅々馬飼（さららのうまかい）、菟野馬飼（うののうまかい）といった馬飼部がおかれ、朝廷の牧場として機能していたのも北河内のこの地方だった。裳羅々、菟野ともに讃良郡の地名で、持統天皇（鵜野讃良皇女）とのかかわりも意識されるが、今では何のよすがも残っていない。

ふるさとかるた



まとめ

- ◆ 大東市域は奈良盆地に成立した中央政権とも距離が近いばかりでなく、奈良と海を結ぶ水上交通のルート上にあり、比較的早くから中央政権の威令が行き渡っていたと思われる。
- ◆ その痕跡としては条里制の地名くらいしか残っておらず、具体的な文化財と言えるものはない。
- ◆ 従って、大東市域における奈良時代をテーマとした歴史的資源の整備は、文字化された学術資料や現地案内板等の整備から、しっかりやって行くことが望まれる。

②中世の物語

IV・戦の道 ④四條畷の戦いを巡って

- 中世の大東市を語るとき、その歴史の経糸を織るのは、東高野街道である。この街道は「戦いの道」と「生活の道」という二つの性格を持つ。戦いの道を今に伝えるのは、「四條畷の戦い」と「飯盛城」の2つの物語である。
- 「四條畷の戦い」は1348年に現在の四條畷市から大東市の辺りで行われた南朝方楠木正行（くすのきまさつら）と 北朝方高師直（こうのもろなお）の戦いである。（場所については他に諸説あり）
- 退潮著しい南朝方の楠木正行軍の本拠地である河内東条（柏原市）を本格的に叩くため、南下してきた足利軍の精鋭である高師直軍6万と、迎え撃つ楠木軍3千が激突。勢力差は大きく、死を覚悟した正行は北上して、高師直軍の本営に至り最後は敵の手に掛ることを潔しとせず、一族郎党が刺し違えて壮烈な最期を遂げた。
- 物語としては、非常に華々しい歴史的な光彩を放つ場所である。
- 700年も前の話なので、遺跡、遺物等はほとんど残っていないが、そもそも古戦場は攻城戦は別として、野戦や遭遇戦では事績を残すことはまれ。桶狭間や小牧長久手等宅地化が進んで公園に記念碑のみと言うところが多い。
- 大東市内には地名として「ハラキリ」「古戦田」と言った地名が残り、ここが激戦地であったと確信できる（「一族の墓」と伝える墓地は四條畷市内にある）。
- 飯盛山には楠木正行の銅像があるが、彼が飯盛山で活動した事績の記録はなく、幕末以降の忠臣楠木正成顕彰運動における近代史的な評価となるだろう。
- 楠木一族のコンテンツはその武将ロマン的な面白さがあるので、こののち、テレビドラマやマンガコンテンツなど、何らかの大きな変化が起こらないとも限らないが、過去の時代につけられたイデオロギー的なデメリットにより少々扱いづらいこともあり、現状では注目されていない過去のコンテンツとなっている。

四條畷古戦場(大東市北条2丁目(旧古戦田)付近)



飯盛山 楠木正行像

IV・戦の道 ④四條躰の戦いを巡って

まとめ

- ◆「四條躰の戦い」は南北朝の戦いの中でも非常に華々しい歴史的な光彩を放つエピソードの一つである。
- ◆但し楠木一族のコンテンツは潜在力があるが、デメリットもあり、注目され難い過去のコンテンツとなっている現状を踏まえながら、活用の方向性と可能性を考えていかなければならない。
- ◆大東市内には遺跡、遺物等はほとんど残っていないが、そもそも古戦場は地勢そのものが遺跡なので、土地活用で残り難く、公園に記念碑のみの処が多い。
- ◆問題なのは、「ハラキリ」「古戦田」等の地名があったが、現在の住所からは消え、記念碑なども一切ない点。
- ◆今後、居住者の記憶からも消える可能性を考えると、地域の歴史として残すために、記念碑や解説版など「ここでその戦いがあった」ことを示すようなシンボルは望まれる。
- ◆「四條躰の戦い」の舞台の地を、一挙に四條躰市から大東市に認識を変えるのは難しいが、こちらが主張する真実を、少なくとも現場に残し、折に触れアピールすることで徐々に変化させることは可能だろう。
- ◆四條躰の戦い開戦地や激戦地（古戦田）、終焉の地（ハラキリ）などの解説板の現地設置が望まれる。

IV・戦の道

⑤飯盛城と三好長慶の時代

■ 飯盛城

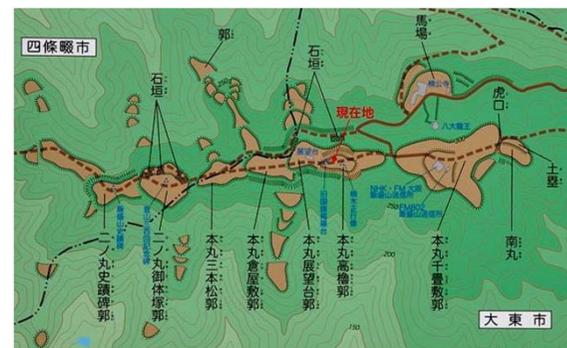
- 戦国時代の東高野街道は、室町將軍家の弱体化により混乱する畿内の覇権争いの中で、京都の政権と、南河内の武士団や、堺の豪商、或いは摂河泉の本願寺勢力などを結ぶルートとして最短距離が取れる重要なルートだった。
- 従って、権力者はこのルートを抑えにかかるし、そのルート上での争いも起こる。
- 戦国期、その東高野街道を見下ろす飯盛山に、大がかりな堀切、本格的な石垣を持ち、摂河泉から京都まで広く270度の展望を持った拠点城郭としての飯盛城が、時の権力者である三好長慶の居城となった。
- 飯盛城は 生駒山地から西に派生する支脈・飯盛山山頂（標高314m）を含む馬の背状の尾根筋を中心に構築された戦国期山城である。
- 西麓に東高野街道、北麓には大和に至る清滝街道、南側には古堤街道から続く龍間越えの道に囲まれ、さらに西麓には深野池が広がり、河内を網の目のように流れる大和川水運の結節点となる港にも至近の、交通至便なエリアに位置している。
- 飯盛山は四條畷の戦いでも陣場として利用された重要な地勢上にある。
- 1531年に河内守護畠山氏の有力な家人だった木沢長政が築城した。後に彼は飯盛城を守護所として、河内守護職に畠山在氏を擁立し、傀儡政権化を狙ったりもした。
- その後木沢氏、安見氏等有力な守護代クラスがこの地を拠点に攻防を繰り返した。



飯盛山 遠望



飯盛城 復元想像模型



飯盛城 縄張図

IV・戦の道

⑤飯盛城と三好長慶の時代

■ 現状

- 1560年、畠山氏や木澤氏、安見氏を河内から 駆逐した三好長慶が、飯盛城に対し石垣や切岸、畝状縦掘りや大堀切を駆使して多重の郭を連結させた拠点となる山城として本格的な構築を行ったとみられる。
- 現状規模で東西400m、南北600m以上を超える、中世最大級の連郭式山城。北から「御体塚丸」「高櫓」「千畳敷郭」など大小数十か所の郭が尾根筋に連続的に配され、尾根筋からの何本かの支脈に沿って副次的な郭が、複数段延びている。
- 尾根筋は多くの人が行楽で通過するハイキングコースになっている。
- 後には高櫓郭の跡地に楠木正行像、国旗掲揚台、通称展望台等が、千畳敷と呼ばれる郭跡にはNHKとFM大阪などの基地局が、馬場と呼ばれた郭跡には楠公寺と言ったように、近代以後の構築物が存在する。
- ただし、遺跡、遺構の残存状況は良好で、石垣や堀切、土橋、切岸、多くの郭、虎口の遺構が残っている。



飯盛城 高櫓郭



飯盛城 大堀切



飯盛城 石垣



飯盛城 土橋

IV・戦の道

⑤飯盛城と三好長慶の時代

■ 三好長慶

- 三好長慶は大永二年（1522）、阿波守護細川氏の有力被官であり、足利義晴、細川高国方を都から追い、足利義維、細川晴元らが堺で幕政を担ったいわゆる堺幕府の実質的に取り仕切った守護代、三好元長の嫡男として生まれた。
- 戦国大名として有名な武田信玄と同世代である。人生五十年と言われた戦国時代でも織田信長より短命な43歳で死去するまでに、阿波、讃岐、淡路、摂津、山城、河内、和泉、大和、丹波の九カ国と伊予、若狭、丹後、播磨の4カ国の一部、という有名な戦国大名の誰よりも広い地域を支配するに至った武将である。
- 戦国時代から江戸時代に掛けては、朝倉家の家訓や、武田氏を描いた甲陽軍鑑、江戸期刊行の日本百将伝では戦国期の代表的な大名として取り上げられている。
- 海外でも、オランダで刊行された歴史地図帳の「日本の統治者の変遷」で、天皇→足利→三好→織田→豊臣→徳川と紹介されている。
- このように有力武将であり政治家だった三好長慶は、文化人としても超一流であった。
- 特に連歌では、谷宗牧、宗養や里村昌休、紹巴などの歴史に名を残した京の連歌師を飯盛山に呼び集め、幾度となく連歌会を催している。
- あるとき連歌会の途中で、逆襲してきた畠山軍と戦っている弟の実休戦死の知らせが入った。彼は、少しも取り乱すことなく、連歌会を最後まで行い、自作の見事な歌を披露して終了させたのち、弔い合戦に出て行ったという。



三好長慶像（堺・南宗寺）

■ 飯盛城と三好長慶の重要性

- 城主となった三好長慶は、細川晴信の被官であったが、弱体化した足利將軍体制を20年間に渡り掌握。細川氏と対立した5年に渡っては、細川氏と結託した足利將軍家も朽木谷に追い落として、政を牛耳った天下人であった。
- 三好長慶は1560年、安見、畠山連合軍を破り飯盛城に入場した後、本格的な戦国山城に改修を施した。畿内と四国十三カ国を手中に収め、天下（最近の研究では、当時天下と言う概念で指す地域は、京・山城、摂津、河内、和泉と比較的狭いものだったという説が強い）を総攬する立場になった彼が造り出した飯盛城は、まさに天下を統治する「（織田信長以前の最初の）天下人の住まう城」即ち天下城であった。
- 北の端の郭に立てば、今でも晴れた日には京都盆地と北摂の淀川流域、さらには神戸、須磨までの大阪平野全域と瀬戸内海、大阪湾の向うの淡路島までが見渡せる。まさにこの城から見える天地の全てが、彼が治める地域であった。
- しかし、ただ天下を見下ろせるから飯盛山に拠点城を定めたわけではない。この地の最大の利点は、戦略都市である堺に大和川と新開池、深野池で直結できると見た、三好長慶の地政学的な判断だったと思われる。
- 堺は貿易で栄える自由都市であるとともに鉄砲の産地でもあり、まさに戦略的に重要な都市である。政治の中心地京都にも淀川を伝えればほど近く、堺にも直結した北河内の深野池東岸は必然の地点であった。
- それほどの権力者、先駆者であるにせよ、三好長慶は織田信長や豊臣秀吉に比べ、決して時代の有名人ではない。
- それは、信長が室町幕府体制の外側からやってきてこれを滅ぼす革命家だったのに対し、長慶があくまでも既存の室町幕府の機構の中で権力を掌握した、旧来型の権力者と思われたからだろう。
- 長慶は、大衆の関心が集まり易い織田、豊臣、徳川、という三人の天下人より世代的に若干早く、彼らとの接点がほとんどないこともマイナスになっている。
- 長慶没後、三好家が内部闘争で畿内を騒がせ、信長上洛で四国に逃げ帰ったことも、三好の低評価の根底にあるだろう。

IV・戦の道

⑤飯盛城と三好長慶の時代

- 飯盛城と三好長慶にまつわる事績は、飯盛山にあるだけではない。
- 大東市内には、この時代の、彼の支配に直接関わる支城や石仏、海外に残された記録などの事績が、他にも残されている。
- これら一つ一つは発信力の弱い歴史的資源だったとしても、それぞれをつなぎ合わせて、大東市域上で展開された、魅力的な一つの物語にすることを検討する。

■ 野崎城

- 野崎は西に深野池、東からは飯盛山の支脈が突き出し東高野街道の通る平地が狭まった地勢であったため、四條畷の戦いの折にも、北朝方の武将が陣を敷き、楠木正行と対峙した記録があるように、古くから戦略上の要衝とされてきた。
- ここに誰が築城したかは不明であるが、河内守護であった畠山氏一族の城であったという説と、河内北部の守護代、遊佐氏の若江城の支城として機能してきたという説がある。飯盛城築城後は、飯盛山へのルート上にあり、その支城のようになっていたものと思われる。
- 野崎観音慈眼寺の裏山から、飯盛城へ向かうハイキングコースにあり、主郭の標高は114Mで、現在は展望台になっている。
- 西北に出郭を設け、さらに稜線を利用して三段にわたり四つの郭を設けていた。現在も一見して郭跡だろうと判る場所だけでなく切岸、堀切も見られ、中世山城の遺構をとどめている。

野崎城跡



野崎城縄張図

IV・戦の道

⑤飯盛城と三好長慶の時代

■ 三箇城

- 三箇城は深野池に浮かぶ島にあったとされる城で、三好長慶に従った河内国人衆の三箇伯耆守頼照の居城だったとされる城である。
- 飯盛城の支城と考えられ、深野池とその周辺の湿地帯を城の守りとした要害だった。城の築城年代は不明だが、飯盛城と同時期のものと推定されている。
- この城には、規模の割に信頼できる記録が残っている点が特徴的である。
- 永禄四年三好政成が守っていた城へ畠山軍が急襲し三好軍が追い落とされ、政成が打ち取られた記録が残されている。
- またルイスフロイスや他の宣教師たちのヨーロッパへの手紙の中で、三箇頼照がキリシタンに入信し、教会が置かれた記録や、城の様子も紹介されている。
- 現在では城の規模や正確な城地も不明になってしまったが、三箇菅原神社が城地の跡地ではなかったかと言われ、城跡の碑が残っている（城地については諸説あり）。



三箇城跡碑

■ 永禄銘地蔵

- 西福寺南にある半肉彫の地蔵で、頼尊越後助が永禄元年（1558）8月、逆修のため大乘妙典千部を供養したと銘が刻まれている。（逆修とは、生前に、自分の死後の冥福(めいふく)のための仏事・供養）
- 永禄元年8月の河内北部は、河内守護畠山高正と守護代の安見宗房が対立を深めていた、ぎりぎりの平穏な時期。その後畠山は三好と結んで安見を成敗したが、三好の台頭を恐れ安見と組み三好長慶に対抗し、教興寺合戦を経て三好の河内支配に繋がる。
- 目まぐるしく力関係が変わる戦国時代の中で、明日の生命をも知れぬ彼は、生前に自分の死後の供養をし、いつ死んでも悔いのない、或いは極楽往生を願ったのかもしれない。
- 現在残る地蔵像自体は古い石仏というだけだが、その時代的背景と建立者の意図を考えたとき、この像が持つ価値と言うものが大きく変わってくる。
- 畠山が消え、三好が消えて行くのを見てきた地蔵は、このエリアが、単に三好の飯盛城下ではなく、戦国の象徴のような地である事を感じさせてくれる。



■ 永禄銘地蔵

IV・戦の道

⑤飯盛城と三好長慶の時代

■ 三箇キリシタン

- 戦国時代末期の北河内は、この時代の日本のキリシタン信仰の最盛を極めた地域であった。
- 京での布教を許し、キリシタンに好意的な態度を持っていた三好長慶は、その端緒を作った。彼は永禄六年（1563）都の僧や公家の排斥運動に対処し、結城忠正に命じて、キリシタンから彼らの教義と信仰を聴取させた。するとその教えの素晴らしさに、忠正始め三好配下の武士たち 73 人が集団洗礼を受けて入信してしまう。その中に三箇城主、三箇頼照や若江城主、池田教正、三木半太夫といった有力武将もいた。（「飯盛山城と河内キリシタン」収録 p24 河内キリシタン物語）
- 三箇頼照（洗礼名サンチヨ）は、宣教師たちも寝泊まりできる教会を三箇に立てた。
- 永禄八年、天皇からの「バテレン京都追放令」が出たときには、多くの信徒が河内の教会に難を逃れてきた。
- この時期、河内の信徒は7000人を数え、とりわけ、三箇教会（大東市）岡山教会、砂教会（四條畷市）があった飯盛城、深野池周辺では「一人の異教徒もいない」と伝えられている。
- 三箇、深野池での復活祭では、飾り付けた60隻の船が深野池に浮かび、2000人のキリシタンによる復活祭の水上パレードが、見物の小舟200隻を集めて15年間も行われた。
- その後、三箇氏は本能寺の変（1582）後で明智方につくなどして没落したが、河内の土豪たちは、三好から織田氏への転換期を乗り切り、河内キリシタンは天正十五年（1587）豊臣秀吉がバテレン追放令を出すまで繁栄をつづけた。
- 河内キリシタンの物語は豊富ながら、大東市に現存するシンボルは何もなく、四條畷市と八尾市の墓碑だけである。
- 隠れキリシタン伝承である野崎観音の MARIA 像説や梵鐘の十字架などは、歴史としては扱い難いが伝説として興味深い。
- 幻の三箇教会は、所在地も角の堂説や諸説あるが、想像物としてでも場所と建物のイメージを固めたいものである。
- もちろん長期的には「大東市の河内キリシタン資料館」的なもので「見える化」していきたいが、現存物に頼れない現状では三箇教会イメージ、深野池のパレードイメージ、フロイスが紹介した三箇城下の描写等を使い、リアルさと深みを加え、砂や岡山がある四條畷市とも連携して、「河内キリシタンが繁栄した飯盛城下」をイメージさせることが重要になるだろう。



田原レイマン墓碑（四條畷市）

河内キリシタンの世界 概念図



IV・戦の道

⑤飯盛城と三好長慶の時代

■『飯盛城の三好長慶と戦国最先端地域』の物語

- 以上、個々の歴史的資源を見れば、大きな可能性はあるが現在はその魅力が知られていない城跡や、伝承と記念碑しか残っていないもの、記録にしか残っていないもの、路傍の石仏まで、それぞれだけでは人を引き付ける力は弱いと言わざるを得ない。
- しかしそれらを繋げて一つの物語として構成することでその価値は拡大し、他の土地にはない有力な歴史的資源となる。
- ここでは、飯盛城の三好長慶に繋がる事績を紡ぐことで、大東市域に広がる「幻の天下人が残した夢の跡」が見えてくる。

大東市の東方にそびえる飯盛山は、いまでもそれを見上げる市民にとって記憶に残る心象風景である。

いまから450年前、この山頂に戦国期最大規模の山城を築き、天下に覇を唱えた武将がいた。三好長慶である。

管領細川晴元の家臣として10代から本拠地阿波、摂津、山城と、勢力下に置き、ついには、將軍と主人の細川晴元を他国に追い落とし、完全に政権を手に入っていた実力者である。

応仁の乱から100年近く、三好長慶は畠山氏を飯盛城から追い、河内、和泉を手に入れ、飯盛城から見える、京山城、摂津、河内、和泉、から淡路、阿波まで、目に見える範囲の全てが、いわゆる「天下」が彼の勢力下に収まったのである。

三箇氏や田原氏等の河内国人や子飼いの武将を野崎や三箇をはじめとした支城を配置して入れ、天下人としての治世を始めた。文化人としても超一流で、歴史に名を残した京の連歌師たちを幾度となく飯盛山に呼び集め連歌会を催している。

花も実もある戦国末期の最初の天下人三好長慶はまた、戦と文化に強いだけでなく、進取の気性にも富んだ人であった。

堺が鉄砲生産の根拠地になるのも、自由貿易自治都市として発展するのも三好家の庇護と理解があったためである。

堺は、大和川と新開池、深野池をつなぐ航路で飯盛城下と直結された、三好の外港だったのである。

京や堺でのキリスト教の布教を許し、彼の配下73人が一斉に洗礼を受けたり、重要な支城のあった、三箇等の城主たちが教会を設置したりと、彼の配下とその勢力エリアがキリシタンに染まり、南蛮文化が流入するのを喜んでもいたのだろう。

飯盛城に三好長慶がいた時代は混乱ではなく、畿内に安定と繁栄をもたらした新しい政治と文化が開花した時代だった。

郭が何重にも連なった飯盛城を核に、大きな石垣が屹立した城塞の山麓には街道が走り、堺に直結した港には市が立ち、更に対岸の集落には支城や教会が立ち並び、南蛮人が闊歩し、住民が敬虔な祈りをささげ、都からの文化人や商人が往来しているといった、繁栄した北河内の幻影が見えてくる。

➤「織豊時代と文化を先取りして繁栄した飯盛北河内」の文脈で、事物や記録を語らせるように活用していく方向性が重要と思われる。

まとめ

- ◆大東市にある「飯盛城」は、織田信長に先んじて、初代天下人が、天下の政治を司った天下城の遺跡。
 - 城主三好長慶は、足利將軍を放逐し、畿内の権力を一手に収めた最高権力者。文化度も高い第一級の人物。
- ◆飯盛城は、戦国時代の山城として第一級の遺跡である。
 - 大小数十か所の郭が連なり東西400m、南北600m以上を超える、中世最大級の連郭式山城である。
 - 切岸や土塁、土橋、虎口、石垣、堀切、郭などが完全ではないが比較的よく残っている。
- ◆大和川を通じ堺へ、さらに海外へと繋がる飯盛とその周辺の北河内は、当時の最先端地域であった。
 - 三箇城、野崎城はもとより、東大阪や四條畷の支城とも連携することも可能な支城ネットワークがあった。
 - 特に三好長慶が許可したことで多くの家臣と領民がキリシタンになり、河内はキリシタンの中心地として繁栄。
 - 家臣の支城周辺には教会堂が立てられ、宣教師たちが住み、南蛮の文物や習俗が流れ込んだ。
- ◆三好長慶の飯盛城は野崎城や三箇城、三箇キリシタンや永祿銘地蔵までを繋げて、「織豊時代を先取りして繁栄した戦国時代の最先端地域、飯盛北河内」の物語を紡ぐことが可能である。
 - 現状これらの事績は、一般には殆ど知られていない。だからこそ知られば、おおきな関心と呼べるだろう。
 - 残されているものは、三好長慶に関する文書、河内キリシタンに関する宣教師の手紙など文書が主軸。
 - ただし、飯盛城跡が目に見えるものとして整備されれば、それを核として情報発信が可能になる。
- ◆【ハード】今後「飯盛城跡、三好長慶、河内キリシタン」のセットで学術研究と遺物、遺跡の整備を進める。
- ◆【ソフト】人々に「飯盛城跡、三好長慶、河内キリシタン」による「戦国最先端地域」の物語を浸透させる。
 - 市民に対して飯盛城跡を中心とした「戦国時代の最先端地域だった大東市域」の物語を啓発する
 - 市外の歴史ファンに対して三好長慶と飯盛城跡を中心とした「戦国最先端地域」の物語を啓発する
 - 市外の歴史無関心者に対して、「知られざる謎の戦国史」として話題化。
- ◆上記ハード、ソフトの両輪を同時に回すことで、シビックプライドの形成と市外からのインバウンドを呼び込む。
 - ハード例 ・史跡指定への調査・関係資料収集・調査委員会・市民運動化・啓発リーダー育成・利用検討委員会
 - ソフト例 ・調査自体のイベント化（TV番組化）・市民イベント計画から資料館構想までのPR策

V・集落の信仰をつなぐ道

⑥山の辺の集落の氏寺・氏神

この項では東高野街道の性格を集落を繋ぐ道として捉え、その地の歴史的資源を紡いで、物語を見出す。この地の歴史的資源と言うのは、ほぼそのすべてが集落の氏寺、氏神と思われる宗教施設である。

(但し、野崎観音だけは、特有の性格を持っており別項を立てる)

従って、歴史的資源の性質と集落の里人の信仰から、物語を紡ぐことになるだろう。

- 北條神社は、平安時代の寛弘年中（1004～1012）北野天満宮から多数流した天神木像（道真像）が深野池の水ぎわに漂着し、それを村人たちが祀ったもの。
- 八幡社は明治年間に合祀されたもので、もともとは鎌倉時代に京都男山八幡宮を北条の八幡山に勧請した社。この八幡宮は戦国期の飯盛城城主の守護神と仰がれ、武士たちの武芸・武運の神として敬われたらしい。
- 北条集落にある北條神社の祭神はどちらも勧請されたものではあるが、その由来が伝わっており古くから里人の信仰を集めたものと思われる。
- 寺川集落にある大谷神社の祭神は大国主神（おおくにぬしのかみ）と同体とされる大己貴命（おおなむちのみこと）。もともとは扁額にある「須濱（すはま）大明神」と呼ばれたものらしく「スハマ」がなまり「スアマ」となったと思われ、燈籠には「須天大明神」と刻まれている。
- 創建は定かではないが、江戸中期の灯籠が残り、須浜大明神の社名からも、この周辺が未だ水辺であった大和川付け替え以前には遡ると思われる。なお大谷神社と呼ぶのは、小字名から来たと思われる。
- 野崎観音の境内にある野崎の南條神社は『河内名所図会』にあるように、古くは牛頭天王宮（ごずてんのうぐう）とも呼ばれた。祭神は平安期以降の神仏習合論により同一視される素戔嗚命（すさのおのみこと）と牛頭天王。竇塔神社に対して北の宮さん牛頭さんと親しまれ、野崎地区の氏神として厚く信仰される。
- 本殿前の木製狛犬には角があり、その台座に延享元年（1744）の銘がある古いもので、極彩色が施され、野崎まいりが華やかになってからの作である。現在、剥離しているが桃山時代の雰囲気漂わせている。



北條神社



大谷神社



南條神社

- 野崎集落には竇塔（ほうとう）神社もある。主祭神は市杵島姫（いちきしまひめ）命だが、本来は素戔嗚命も祀られていた。市杵島姫命は誓約（うけい）によって生まれた素戔嗚命の娘。厳島神社にも祀られる航海安全の神。やはり、水辺の信仰を思わせる。野崎不動尊に隣接した谷あいにある。
- 「とめやん」という狸の民話が伝えられている。野崎の人々から親しまれた社だったのだろう。
- 野崎の専應寺は、山号を戸森山といい本尊は阿弥陀如来。開基は親鸞の高弟二十四輩の一人、唯信と伝えられ、永正十七年（1520）の「阿弥陀如来絵像」などが残されており、浄土真宗の初期からの信仰の場を思わせる。真宗興正寺派だったが、明治期に本願寺派となる。正しい野崎まいの行程は、まずこの寺にお参りし、そののち慈眼寺に向った。
- 北条の十念寺は浄土宗西山派。元は融通念仏宗の寺院。楠木正行公菩提寺といわれる。木の宮坊という人が私田をなげうって寺院を建立し、楠木正行を始め一族郎党の菩提を弔ったのが始まりと伝わる。「本堂再建奉加帳」に記された略縁起には、この地が戦場となった四條畷の合戦で倒れた武士の霊が山野をさまよっていたので融通念仏を唱えとおとなしくなったとある。
- 寺川の十林寺は浄土真宗本願寺派の寺。由緒は不明。寺川という地名のおこりになった蓮光寺という、行基開基の七堂伽藍の大寺の「紫雲山蓮光寺略縁起」が伝わる。



竇塔神社



専應寺
本堂



専應寺
阿弥陀如来絵像



十念寺

- これらの社寺を見て行くと、神社の祭神は、北野天満宮から流れ着いたという確たる縁起をもつ北條神社の天神縁起以外、素戔鳴命、大己貴命、大国主、など市杵島姫命も含めすべて国津神とよばれる神々であり、国づくりの大本と言える神々である。またすべての神社がどこからかの勧請によって祀られたものであり、この土地にその神の説話を持つものはない。
- 仏教寺院をみると、浄土宗、浄土真宗系の寺院で、創建は15世紀から、或いは16世紀に遡る。
- 真宗の東西分離以前から続いてきた、念仏を唱えて、日々の安穩、来世の往生を望む一般民衆の強い祈りによって支えられてきた寺たちである。決して、貴人の寄進や有力な旦那衆によってできたものではない。

まとめ

- ◆ 東高野街道に沿った集落に中世からあり続けた寺社は、集落の繁栄を守り、その集落の人々の往生と来世を願った、集落の氏神、氏寺である。
- ◆ 現在の神社や寺も、そのような集落の人々によって守られ、伝えられているものと思われる。
- ◆ ここにあげた多くの「氏寺氏神」は、現代化された集落の中で、規模の大きなものでなく、日常的な風景になってしまっていると思われ、一般的にいう歴史的資源としての価値は、残念ながら決して高くない。
- ◆ ただし、集落に暮らす者にとって、社寺はその集落が戦国期から乱世を生き抜き、近世を作り、近代に発展したこの集落の歴史とともにあった、その集落の一体感のシンボルとなりえるものである。
- ◆ この集落の氏寺、氏神は、神社と祭礼、寺院と墓参や縁日などの集落の風習や行事とともに、その集落を活性化する「集落の歴史的背景とともにある、生活風俗資産」である。
- ◆ 歴史的資源の利用・活用の仕方として、観光化の資材として使うのではなく、「集落の歴史的背景とともにある生活風俗資産」を次世代に伝承し、集落を活性化するための、シンボルとして、その現場として集落の社寺を利用する方向性が求められる。

V・集落の信仰をつなぐ道

⑦淵の辺の集落の氏寺・氏神

続いて古堤街道でも街道の性格を集落を繋ぐ道として捉え、その地の歴史的資源を紡ぎ物語を見出す。ここでも残された歴史的資源の多くは、勿入淵跡を除けば、ほぼすべてが宗教施設の社寺である。

- 諸福から中垣内までの古堤街道にある社寺は、時代的に3区分される。
 - ①奈良、平安、鎌倉、室町時代からの系譜をひく古社寺。
 - ②戦国終盤、畿内から戦が無くなり、農民が生産に専念できてから、大和川付け替えまでの時代。創建は鎌倉、室町でも、戦により失われ再建された社寺もここに入る。
 - ③近世大和川付け替え後の信仰に支えられた社寺たちの時代である。
- ここでは、畿内から戦が無くなった後のものを近世に送り、中世以前からその信仰が始まったものを取り上げる。
- そう見直すと、奈良、平安時代からの系譜をひく古社寺は、実はそう多くはない。
- 中垣内の善宗寺は、真宗本願寺派の寺だが、平安中期の中宮寺が関わる伝えがある。
- さらに中垣内の須波麻神社（中垣内）は延喜式に記載されている古社である。
- 中垣内という集落が、それこそ旧石器時代から連綿と人が生活をしてきた遺物が出てくるような、人が暮らすのに適しているエリアであり、東高野街道と古堤街道の交差点としても賑わうところだったのだろう。須波麻神社も善宗寺も古くからの中垣内集落の氏神と氏寺として、里人からの信仰で支えられてきたと思われる。
- 灰塚も古代の遺物が出土した、昔から人が暮らしてきた土地だった。その素戔鳴神社も創建時期は判らないが、この地の産土神とされており、古くから伝わるものかと思われる。ずっと信仰を繋げてきたのだろう。



善宗寺



須波麻神社



素戔鳴神社

- さらに、深野池側の津の辺に、日蓮宗久遠寺末の本妙寺がある。創建については永享元年（1429）村の角先重右衛門が日蓮宗道場を建てたとする説と、文安二年（1445）京都本圀寺第十四世日助上人が法難を避け、この地に上がり数カ月後に八丁四方の大伽藍を興したの説とがある。どちらにしても15世紀前半の古刹である。
- また、キリシタン時代、すべての仏教施設が焼き払われたと伝えられる三箇にも、永正十四年（1517）の阿弥陀如来絵像が残る、真宗大谷派の古刹、正覚寺という寺がある。もちろん大谷派に属するのは江戸期に入ってから。
- 氷野の集落にある氏寺・氏神は、両方とも中世と近世で宗旨を変更している点が面白い。本念寺は真宗大谷派だが、本念寺と改め大谷派となったのは真宗東西分離後の近世。創建は不詳で、明治初年の記録の中に、天文五年（1536）道欽という僧が開き、正福寺と称したとある。
- 氷野には北野神社もある。由緒は不詳だが、古墳時代の遺跡の上に建ち、古い社と思われる。現在の祭神は菅原道真で天神だが、以前は素盞鳴命を祀っていたという。

本妙寺



正覚寺



本念寺



氷野北野神社



まとめ

- ◆やはり古堤街道沿いの寺社も、集落の里人の、氏神、氏寺として、集落の繁栄を守り、その集落の人々の往生と来世を願った、集落の為のものであった。
- ◆東高野街道沿いの中世の社寺同様、一般的にいう歴史的資源としての価値は、残念ながら決して高くない。
- ◆やはり、集落に暮らす者にとって、その集落の一体感のシンボルとなる「集落の歴史的背景とともにある、現在進行形的生活風俗資産」として、集落の活性化に活用していくような利用が求められる。

V・集落の信仰を繋ぐ道 まとめ

- 東高野、古堤街道には集落の信仰の事績があり、集落のアイデンティティを形成している。
- 中世から集落とともに生きてきた社寺は歴史的資源と言うよりも、現代まで続く集落の郷土遺産としての信仰や風俗を継承してわがまち、ふるさと大東の意識を高めるベースとして利用する。
- 街道・集落の信仰遺産は、集落の氏寺、氏神への信仰の風習を継承すべく、郷土意識の高揚を図る。

- 龍間集落は、大東市域の中でも他のエリアとはことなり、生駒山地の稜線からの西斜面に位置し、生駒山と飯盛山を繋ぐ鞍部を抜ける街道沿いに成立した集落である。
- 弥生期から人が暮らした遺物の出土はあるが、古堤街道龍間越が難波、河内と奈良の都を繋ぐ連絡道として利用されるようになってからの事績が多い。
- 歴史的資源として残るものは、ほとんどが社寺仏閣や石仏などの信仰対象物であるが、大東市の平野部の社寺が、国づくりの大本の神を勧請した氏神や、浄土真宗や日蓮宗という大衆的な宗派の氏寺であるのに対して、それとは違う表情がある。
- 生駒山は古くからの信仰の対象であったが、特に修験道の開祖である役小角の奇譚が伝わることで、修験道の聖地にもなっている。修験道では、役小角が感得した蔵王権現と並び、生駒山宝山寺の本尊でもある不動明王への信仰が強い。
- また伝説によれば役小角は、龍神、水神であり、干ばつや水害を司ると信じられた八大竜王を大峰山洞川の龍泉寺や秩父今宮神社などいたるところに奉祭したと言われている。（各社寺の由緒より）
- 農業が基幹産業であった日本社会に於いて、ある意味行者の存在意義とは、八大竜王への神通力で、雨をコントロールしてくれると信じられてのものだったのだろう。
- このように修験道と不動明王、八大竜王信仰は、役小角信仰を核にセットになっている。



役小角



不動明王



八大竜王

- その上で龍間地区を見ると、開山縁起に龍神伝説がある龍光寺と龍間寺が存在した。堂宇そのものは廃寺になっていたり、荒れ果ててはいても、本尊が存在することで信仰を目に見えるものにするには可能だろう。
- さらに龍間不動尊は、不動そのものへの信仰もさることながら、現在でも滝行の場であるかのように、生きた修行を感じさせるステージである。
- さらに役行者飛翔像が優れている。永禄十年の銘をもつこの像からは、戦国期にも役小角の神通力を信じる人々の信仰が見えてくる。
- ここからさらに中垣内の役小角像や大東市域の様々な場所にある行者堂や大峰道の道標に繋がっていく。古くから近年まで大東市域全域に伝わった民間習俗「峰入り」への熱い信仰を伝えているものになっている。
- 修験道や行者信仰、龍神信仰とは異なるが、一石十三仏や、一石六地藏、あるいは延徳銘地藏といった野仏たちは、里人が真剣に功德、往生を求めたあかしで、素朴な念仏の教えとリンクして、この地域の流れる濃密な宗教的な空気を形成している。

龍光寺



龍間寺本尊千手観音

龍間不動尊

役行者飛翔像



一石二段六地藏板碑 (市指定文化財)



一石十三仏



灰塚行者堂



役小角像

まとめ

- ◆生駒山と飯盛山の鞍部にある龍間集落は、龍神信仰と不動明王信仰、役行者信仰などの修験道や浄土信仰に関わる特異的な宗教的な歴史的資源が色濃く集中しているゾーンである。
- ◆従って、龍間を現代まで続く、修験道や龍神信仰のような、若干ミステリアスな宗教的色彩が強い空間としての空気を醸し出すことが可能な地域と考えられる。
- ◆龍間の歴史的資源には、現代まで続く、「不思議な力が得られる、パワースポットのエリア」という物語を創成できるベースがあり、今日的なインバウンドマーケットを取り込める可能性があるだろう。

③近世の物語

Ⅶ・豊かな暮らしへの祈り ⑨治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神

- 大東市域は先にも述べたように、近世の大和川付け替えとそれに続く新田開発によって大きく変化する。
- もちろん、新田が開発される以前の、戦国終盤、畿内から戦が無くなり、農民が生産に専念できてから、大和川付け替えまでの時代にも、変化がなかったわけではなく、この地域での戦が無くなったことによって、生活の様相は変わったと考えられる。
- 深野池や大和川、新開池の淵を巡る大東市域内にあった集落では、人々の往来や農耕が活発になることで、そこに住む人々の信仰のあかしとなる社寺という、いまに至る歴史的資源を残している。
- 創建を慶長元年（1596）と伝える諸福の勝福寺は、現在も135体を残す色彩も鮮やかに残る本堂の五百羅漢像が逸品の曹洞宗の寺である。
- 諸福の天満宮も寛永二十年（1644）勸請。本殿は江戸初期の権現造りで、桃山建築の雰囲気をよく残しており、平成の修復で元の鮮やかな色彩が蘇った。
- 三箇菅原神社は、その地に三箇城があったと伝承された土地に造営された菅原道真を祭る神社。創建年代は不祥で、古い記録では1600年代には既に「氏神天満宮」と称されていた。祭りのときには近在のだんじりが集まる三箇の氏神として、里人の信仰は篤い。
- 御領菅原神社も勸請された時代は不明だが安永七年（1778）の鳥居がある。御領開拓者11軒で構成される宮座が残っていたことから、この地域の信仰の中心だったと思われる。霽（おかみ）神社は、その御旅所だったとも元宮だったとも伝えられる。
- 大谷派の寺院としては、三住町の本伝寺がある。創建は元徳年間（1329～1330年）僧伝祐によるというが、その時点では畿内の浄土真宗は勢力が強くない別派であったかもしれない。
- しかし近世において大谷派は勢力を強め、本伝寺は大谷派におけるこの地方の布教拠点とされ、本山の直轄寺としての色彩が強かったと思われる。

五百羅漢像（勝福寺）



諸福天満宮

三箇菅原神社



御領菅原神社



霽（おかみ）神社



本伝寺

Ⅶ・豊かな暮らしへの祈り

⑨治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神

- 大谷派の西福寺もある。寛永十四年（1637）蓮如上人掛幅の裏書きには寺号がないが、一如上人（1678～1700年）の時下附された親鸞聖人真影に寺号が見えることから、江戸期の前期からは続く寺であろう。
- 氷野の本念寺は明治の記録に、天文五年（1536）僧 道欽が開き正福寺と称したとある古刹だが、近世の浄土真宗の東西分裂で大谷派の寺となった。
- 氷野には、北野天満宮の菅原道真を祀る氷野北野神社もある。古くは素戔鳴命を祀っていたが、のちに祭神を変えたといわれている。
- 中垣内の真宗大谷派覚順寺も寺に伝わる教如上人画像裏書には寛永十八年（1641）の年号が見られる事から開創は江戸初期であると思われる。
- 灰塚の常宗寺も創建は元禄以前と伝わる。これは真宗本願寺派だが戦前は東西本願寺の兼帯末寺であり、東西分離前からの可能性もあるかも知れない。
- 御供田は、平安時代に源義家が後三年の役の戦勝の礼として、この地の荘園を石清水八幡に寄進したことが地名の謂われ。石清水八幡をこの地に勧請し御供田八幡宮としたのはよくわからないが、900年前とも元禄年間ともいわれている。
- さらに、数は多くはないが、創建の時期が比較的明らかで、近世大和川付け替え後の新田経済を背景にした信仰に支えられた社寺を見て行く。
- 浄土真宗本願寺派の御供田の安楽寺は正徳四年（1714）の記録があるのでこの頃が創建期であろうと思われる。
- 平野屋の坐摩（ざま）神社は、新田開発に伴い享保十三年（1728）に東本願寺難波別院そばの摂津一の宮坐摩（いかすり）神社から勧請されたもの。平野屋会所に付属している形だったと思われる。
- 太子田の大神社は、天照大神を祀る。コンパクトで彩色された桧皮葺神明造りの屋根を持つ本殿からは、近世にはいつてからの集落の経済力を伺わせる。



覚順寺



常宗寺



御供田
八幡宮



坐摩神社



太子田大神社

VII・豊かな暮らしへの祈り ⑨治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神

- また深野神社とも呼ばれる両皇大神宮は、アマテラス、豊受神、菅原道真を祭神としているが、深野会所に付随したもののようで、平野屋会所の坐摩神社のように、新田を守る神として勧請されたものと思われる。
- 浜町の住吉神社は、キリシタン教会の伝承地である住道浜にあったが、寝屋川の行き来する船の往来が頻繁になるに従い、その安全を願って勧請されたものだろう。
- 以上の様に見てくると、その構成には大きな特徴がある。



- 一つは近世に創建された、あるいは中興の大東市域の寺院には、真宗大谷派に属する寺が目立つ点である。
- そもそも、行基、空也の昔から庶民にも仏教は伝えられてはいたが、庶民を対象とした宗派の出現は鎌倉時代の浄土宗以降と言え、さらにそれが大きな教団となるのは、室町後期、蓮如の浄土真宗の勢力拡大に始まると考えてもよいと思われる。
- 大東市には庶民を対象とした浄土真宗、浄土宗系、或いは日蓮宗系の寺院が多くみられる。戦国時代はこの宗教信者自体が戦闘集団であった時代もあり、河内はその勢いの激しいところでもあったが、戦が収まった後は、人々は元々の、日々の安穏を得るための信仰を強めたに違いない。
- そのなかで、新田開発は大坂の真宗大谷派の拠点である難波別院の財力で行われた。新田開発以前からの真宗大谷派の、この地への勢力扶植したい意図が見えてくる。
- もう一点は、菅原道真を祭神とする菅原神社（或いは天満宮）が多い点である。天神は雷神であり雨を司り厄災を退ける力を持つと信じられていた。多くの大東市域の集落が天神を祀ったのは水と闘い、水をコントロールするため、と思われる。
- 霨（おかみ）神社のおかみは龍の古字であり、龍神、水神を示すもの。灰塚の水神宮はまさにそのままの水神で、これらすべてが水に関わる信仰のものである。水を司ることは、農耕に直結している。龍間地区を除く、中世までのこの地の神社のほとんどが国づくりや産土神への信仰であったのに比べ、戦が終わり明日の命も判らぬ時代ではなくなり、生産に励み土地に手を入れ本格的に水と闘い豊作を願う事ができるようになって、水を司る神への願いを大きくしていったものと思われる。
- 新田が開発され集落が活性化し、集落の信仰も変化発展していった。豊かな農作物が実り、人々が行き交うようになって、人々の暮らしが大きく変わったことを今に伝える証として、社寺だけでなく豊かな歴史的資源が残されるようになる。

まとめ

- ◆戦国の戦が収まって後に立てられたと思われる大東市域の寺院は、ようやく農耕に精を出せるようになった集落の農民たちが日々の安穏と来世の往生を願って念仏した、大衆の為の寺である。
- ◆また神社には、雷神や水神を祀り、水害や水不足から逃れることへの信仰を深めた。
- ◆これらは、人々が安心して生産に励み、豊かさに向って歩み出した証左であろう。
- ◆創立からの歴史も深い浅いがあり、残されている造作物にも見るべきものもあるが、そういったもので人を呼ぼうと寺院や神社の目に見える価値を比べると、特別高い価値があるというわけではない。
- ◆しかし、中世でも、集落の氏寺、氏神がそうだったように、やはりその集落にとっては特別な氏寺、氏神であり、一体感のシンボルとなるものである。
- ◆やはり、中世の氏寺、氏神と同様に、その歴史とともに伝統行事、習俗を伝え、一体感を体感するとともに、豊かに発展してきた集落の歴史を認識することで、誇りある集落としての活性化に利用できる。

Ⅶ・豊かな暮らしへの祈り ⑩神とともに豊作を喜ぶ だんじり

- 大東市のだんじりは、豊かな実りを神々に感謝する秋の祭礼において、依代（よりしろ）である御座の屋形に神の遷座を願い、神とともに村中を練り歩きながら、五穀豊穡の感謝とよろこびを共にする習俗と思われる。
- だんじりそのものは中世の祇園祭にその起源が求められるが、大東市のだんじりとなると、詳しい歴史は判らない。但し隣の四條畷市の旧記には明和年間から散見された旨が記されており、大東市でもほぼ同時（1760年代）には始められたと思われる。
- 元和偃武よりほぼ150年がたち、新田の開発からも60年となれば、十分に豊かな農村としての発展を遂げてきたであろう大東市域の集落が、まさに豊穡のときを迎え、各集落が競ってだんじりを神々に奉納していただろうと想像される。
- 北條神社、南條神社、寶塔神社、大谷神社、須波麻神社、三箇菅原、御領菅原神社、坐摩神社、御供田八幡、素戔鳴神社、諸福天満宮など、既に述べた各集落の氏神や、また挙げてこなかった神社も含め、18の神社に奉納する32台ものだんじりが江戸時代に成立した原形を現在に至るまでとどめる集落単位の氏神の祭りである。
- 大東市のだんじりは北河内型と呼ばれる大型のものが大多数を占め、集落によって形が多様であるばかりでなく、祭礼に関わる用具やお囃子等も、その集落の地形的な条件や歩んできた歴史の特長があり異なっている。

大東市のだんじり祭り風景



Ⅶ・豊かな暮らしへの祈り ⑩神とともに豊作を喜ぶ だんじり

- 大東市のだんじりは以下の三つの点で優れている。
 - 集落のそれぞれの氏神への五穀豊穰を感謝する、「農村型純神事」の形態が江戸時代から現代まで伝えられている。
 - 北河内型と呼ばれる大型のものであり、贅を尽くした「幕」と精緻な彫刻の装飾と彩色が施され、非常に華麗である。
 - 大東市のだんじり祭りには32台のだんじりが曳行されるということは、量的にも非常に壮観である。
- このように魅力の多い大東市のだんじりだが、残念な点がある。
- 広く関西圏の中でだんじり祭りあるいは神の依代である御座車を曳く祭りを見ると、No.1ではない。
 - 関西で或いは全国でも、「だんじり」というワードから想起される地域名は岸和田である。大きさは北河内型より小ぶりな岸和田型と呼ばれるものだが、北河内型よりも精緻で華麗な彫刻が派手な点と、80台というボリュームがその魅力。
 - 加えて何と言っても曳行時のスリリングなスピードの生む興奮が、特別な魅力となっている喧嘩祭りの町衆の祭り。
 - 神の依代の御座車をゆっくり曳く祭りでも美しさを競えば、京都の祇園祭が豪華な装飾の山鉾でNo.1となる。
 - ただしこれも、発祥は疫病での死者を弔う精霊祭で、室町時代、京の文化が爛熟するなか、山鉾の贅を競うことで、経済力が高まった京の町衆の力を見せつけるという、やはりこれも町衆の別種の祭りである。

まとめ

- ◆ 大東市のだんじりは、「集落の氏神とともに豊作を寿(ことほぐ)農村型神事の原型を色濃く残すもの。
- ◆ 大東市のだんじり祭りと、岸和田のだんじり祭りは、全く異なる祭りであり、比べるべきものではないのだがどうしても「だんじり祭り」として一括して見られてしまいがちで、比べられると、No.1にはなれない。
- ◆ 大東のだんじりを「町衆だんじり」とは違う「農村だんじり」のNo.1に位置付けてインバウンドを獲得する。
 - 威勢の良さを競う町衆だんじりとは違う「集落と神々との交歓」の素朴な祭りの魅力をより高めて行く。
 - 集落内のつながりと、集落間の健康的な競争意識を堅持、活性化する支援をおこなう。
 - 外来者に向けての、告知や現場案内、観覧席や休憩所などのホスピタリティは当然のことながら高める。
 - 「豊作を神と共に寿ぐ農村の素朴な神事」という価値の本質を、来街者と、参加住民も含めて啓発する。

VIII・賑わう往来の記憶 ⑪交通の繁栄とおかげまいり、おかげ灯籠

- お伊勢まいりはもともと“ぬけまいり”といった。封建支配の厳しい江戸時代、何とか参宮したいあまり領主や村役人はもちろん、雇主・主人や家族にさえ告げないで旅立つ者が多かったからという。こうした人々の中には旅費や服装の準備もない者が多かったので、沿道の施しにたよってお参りした。そこで参宮のことを“おかげまいり”といっている。
- おかげまいりが盛んになったのは江戸時代からで、だいたい60年周期で高まったといわれる。そのうち最も盛況を極めたのが、文政十三年（1830）であった。
- この年の3月27・28日に阿波に発生したおかげまいりの群は河内地方に及びこのうねりに当地域もまきこまれ、村を上げた踊りにまで発展した。三味、太鼓のはやしに合せ、二日も三日もうかれ、踊り続けた。その場所がどこであったかは分らないが、市内に残る“おかげ灯籠”はその鎮まりに安堵し、村中安全を祈念して建てられたものであり、当時のにぎわいを思いおこさせてくれる。
- 大東市域にはおかげ灯籠が八基あるがその中でも、灰塚のものは一番壮大美しいもの。「基壇」は三層の高さ3m30cmの堂々たる石灯籠である。
- 中垣内の須波麻神社にあるおかげ灯籠は近くの東高野街道筋から移設したもので、社標と道標を兼ねている。正面に“太神宮 東 なら・木津”、右面に“西 大坂 文政十三年（1830）庚寅十二月”、左面に“南 高野山”とある。
- また大谷神社のおかげ灯籠も北は京都、南は高野山を示す道標になっている。



おかげ灯籠（灰塚）



須波麻神社おかげ灯籠



大谷神社おかげ灯籠

VII・賑わう往来の記憶 ⑪交通の繁栄とおかげまいり、おかげ灯籠

- そもそも大東市は、道標が多いところでもある。東高野街道と古堤街道が走っており交差する土地であるため、明治に入ってからのもが多いがその交差点はもとより街道沿いに多くの道標が残っている。
- 道標は当然その街道の行き先案内板であり、そこを旅する人々が迷わないように用意されたものである。江戸時代も中期から後期になって安定してくると、人々も豊かになり、旅をする町民や農民がそれほど珍しいことではなくなった。
- おかげ参りといった爆発的な人々の移動もそうだが、通常でも伊勢講や大峰講等の代参講などで、旅をする人は少なくなかった。慶応のおかげ参りの場合は外圧による世情不安を背景とした、「世直し」「ええじゃないか」といった異なった要因が混入してくるが、基本的には世の中の往来が活発になったのは、やはり人心の安定、経済の向上が根本にあると思われる。
- その意味で、おかげ灯籠や道標は、この地域の経済が健全に発展していることの証左ともいえるのではないだろうか。

東高野・古堤街道交差点石碑



古堤街道碑（住道本通商店街）

まとめ

- ◆大東市には、おかげ灯籠や道標など、人々の往来に伴って建てられた石造物が多く残る。
- ◆それらは、人心が安定し経済が向上し、往来が活発であったこのエリアの歴史的資源である。
- ◆古堤街道や東高野街道の現状は、街道の魅力を伝えるには難しく、おかげ灯籠や道標も、野仏等とは異なり、それ自体が鑑賞物としての魅力を持つとは言い難い。
- ◆しかし痕跡であり過去の記念碑として、移動や街道のにぎわいを記憶に残すよすがとなり得る。
- ◆おかげ参りの記録に繋がるおかげ灯籠や人の往来の賑わいの証左となる道標は、近世のこの土地が交通上の要路であった証である。大東市の発展の歴史の大きな物語の物証として活かしていく。

Ⅷ・賑わう往来の記憶 ⑫野崎まいり

- 野崎まいりとは、広義には福聚山慈眼寺への参拝を指す言葉だが、狭義には旧暦四月一日から八日まで慈眼寺で行われる、有縁無縁のすべてのものに感謝の御経をささげる無縁経法要への参詣を指す。
- 野崎まいりの流行、寺運興隆の背景には、慈眼寺五世大真、六世祥堂の尽力があったといわれる。享保六年（1721）3月、前年から続いていた観音堂の修理が完成した。このため三月十八日から四月十八日までの間、落慶供養が行われ、同時に25年に一度の開帳を基本としている秘仏である本尊が特別開帳された。このときの開帳が記録に残る野崎観音の開帳では最も早いもの。秘仏が開帳された同年の野崎まいりが人々の間で大いに反響を呼んだと思われる。
- また、寺では御開帳の立て札を大坂のあちこちに立て、民衆に宣伝したため、近在のみならず遠郷からも人々が押し寄せたと言う。
- さらに、同年七月に上演された近松門左衛門「女殺し油の地獄」に野崎まいりの屋形船や道行く人の賑やかな参詣の様子が演出されているらしいが、それも当時近松と親交のあった大真が、近松に戯曲を書いてもらうことを依頼したためという話もある。
- はじめは落慶法要の特別開帳だったものが、大評判となり、戯曲に取り上げられ、人形浄瑠璃となるなどして、ますます盛んになっていったものと思われる。
- 落慶法要が行われた享保六年とは、まさに大東市域の新田開発が進み、豊かな実りを生み出す土地として安定的な生産を始めたころと思われる。近郷の経済的な発展は、伽藍の復興整備の有力な支えだったろう。



福聚山慈眼寺 本堂



慈眼寺本尊十一面観音（秘仏）

VII・賑わう往来の記憶 ⑫野崎まいり

- また新田開発は、野崎への交通ルートも大きく変えた。
- 野崎まいりは大坂の八軒家浜から、屋形船に乗っていくものもあれば、古堤街道を進むルートもあるが新田開発によって深野池は干拓され、深野新田には幅7.2mの井路が築かれ観音井路と称して参詣用の船の通路にもなった。
- 着船するところも観音浜と呼ばれた。陸路をたどって参詣に訪れる人も観音井路の堤を通ったので、池の周囲を回るより相当近くなった。こうして大坂から最も近く、船でも来られて、日帰りできる野崎まいりは振り売り喧嘩等の風俗を作りだしながら庶民の娯楽、レジャーとして人気が高まり定着し、ますます活況を呈していった。
- 野崎まいりを語る歴史的資源としてのコンテンツを見ると、角の堂浜の存在を示す遺構として、またその船の安全運航を祈願した社として住吉神社があり、寺に近い船着場である観音浜には記念碑がある。
- さらに正式な参拝ルートとされている専應寺の太子堂や、慈眼寺の鎮守社としての南條神社などは、野崎まいりの盛んな頃の江戸期の参詣ルートを示すものである。
- また野崎まいりは、お染久松の心中物語の戯曲や、落語や小唄にも登場する。これらソフトコンテンツは野崎まいりという名称の認知や接触には重要な武器ではあり、ノスタルジーを醸す小道具としての力は備えている。



野崎まいり（河内名所図会）



住吉神社



観音浜の碑



「大東八景・絵日傘の舞」
に描かれる野崎観音と
お染久松



専應寺の太子堂

VII・賑わう往来の記憶 ⑫野崎まいり

- 但し今も野崎まいりには、参道に屋台があつまり、毎年20万人の参詣があると聞く、現代に生きているイベントでもある。歴史的資源として野崎まいりを学びに来るものはほとんどおらず、多くは現代のレジャーとしての野崎まいりを楽しみに来る20万人だろう。屋台巡りだけで観音参詣まで歩を進めない者もかなり多くいるのかもしれない。
- だとすれば、この20万人に野崎観音への参詣、野崎まいりという歴史的資源を入りに、大東市の歴史に関心を持ってもらい、大東市への再度の来訪や、だれかを誘ったり、紹介したりするなどの役割を期待できるのではないだろうか？

野崎まいり：参道のにぎわい 露店



現代に復活した野崎まいりクルージング



復活 野崎まいり（昭和十年頃）



まとめ

- ◆野崎まいりは、江戸時代大評判を呼び、多くの人押し寄せた秘仏十一面観音の短期御開帳。
- ◆参詣だが、日帰りできる距離で、舟でも行き来できる、気軽な庶民のレジャーとして定着した。
- ◆現代でも縁日に、20万人以上の人出を呼び込む、既に有力な集客装置である。
- ◆ただし、野崎観音の歴史への関心や認識は高いと思われず、参詣すらしない客も多そう。
- ◆野崎まいりの人出を、参詣、歴史認知を入りに大東市への関心に結び付け、市への再来訪を促す。
 - 船着き場や道中の風俗、参詣の正式ルートなど、野崎まいりの歴史的資源は、ほぼ全盛期の舟運に関わるものである。
 - 屋形舟を現代によみがえらせ、野崎まいりの来街者に体験させることで、野崎まいりの歴史に触れさせる。
 - 野崎まいりクルージングの定期化や、現代の振り売り喧嘩を仕込む等が考えられる。

Ⅸ・豊かな集落の風景

⑬御領の水郷地域

- 大東市の北西、門真市と隣接する御領地区は旧御領村として、中世に集落が形成され安土桃山時代の文献にも残る、古くからの水郷地帯。
- 大和川の付け替えに続く新田開発にあたり、旧大和川の支川の河道や深野池とその周辺の低湿地が干拓されたときに、水路（井路(いじ)）が縦横に整備され、灌漑や田舟による水運等に活用され、明治初年から戦前まで北河内郡で最も裕福な地主・自作農の多い村と言われたほどの豊かな農業生産を支えてきた。
- さらに低湿地で水害の多かった御領地区では、昭和十九年、太平洋戦争の戦時中にもかかわらず水害の軽減と稲の収穫量を増やすため住民自ら排水路整備を行い、以来、その水路を農業、通運、生活用水等、日常生活のさまざまな場面で利用してきた。
- その景観の特色をなす御領水路は、近年の都市化による田畑の減少で水路が分断され、下水道整備による水量の減少により水の流れが無くなり、水質悪化が問題となっていたが、下水道処理水を導水し、水路の水質改善と、町並みと調和した親水性のある水辺空間「水郷の町御領」を復活させた。
- 今も水郷の面影を残す水路に面し、門構えのある大きな屋敷が立ち並び、120年を経た母屋の建替えと長屋門、蔵を改修した御領の家を中心に、都市化が進んだ現在でも、水路沿いに段倉が建ち、田船が浮かぶ昔ながらの水辺の風景、歴史的街並みが残された水郷として広く市民に親しまれている。



御領水路

御領菅原神社前水路



御領水路船着場



御領の街並み



IX・豊かな集落の風景

⑬御領の水郷地域

- 現在は田舟の乗船体験が地域ボランティアの方の協力で運航されている。
- 4月～9月の第一・第三日曜のみの運行で、料金は100円
- また、この地区の景観を作る大きな要素は、水路沿いの旧家群である。
- 水路は御領の重要な交通路でもあり、家々からは水路に向けて小さな船着き場が出ており、家から直接田舟に乗って、田ごとやレンコン掘りに出かけたと言う。また洗い物をする場でもあった。
- 水路を挟んで両側に大きな農家が並んでいるが、家の土台を支えるしっかりした石垣の上に、段蔵とよばれる北河内独特の蔵が建っている。(段蔵は水害時に荷物を高い位置に避難できる段差を付けた階段状の蔵)
- そういった御領の旧家を代表するのが辻本家住宅。
- 平成二十七年「国土の歴史的景観に寄与しているもの」と評価され、「登録有形文化財」に登録された。
- 辻本家は御領村の庄屋を務めた家柄で、上層農家のみに許される式台や、広い土間、広敷、床の間を備えた八畳間などがある。
- 主屋は木造平屋鋼板葺き、もとは茅葺きで、江戸時代末期の建物の特長をよく残している。
- 屋敷地北側には伝統的な作りによる長屋門や土蔵などが風情を作る。
- 近年の改修工事により建築当初の表構えが復元された。
- 建物は非公開であるが、年に数回程度特別公開が実施され、多くの人が庄屋の屋敷を体感できる。

田舟の乗船体験



御領水路と田舟



辻本家



- ただし、若干危惧する点は、隣接する門真市の砂子水路も桜の季節には田舟の乗船体験企画があるばかりでなく、関西で見ると水郷といえば近江八幡が上がる等、必ずしも競争力が抜きんでてはいない点である。



体験性の高い田舟乗船



ビジュアル性の高い古い町並み

まとめ

- ◆ 御領の水郷風景は、まず、風景として古い町並みが残されており、ビジュアル性が高い。
- ◆ 田舟乗船、庄屋屋敷見学など、体験性が高く楽しめる。
- ◆ 御領の水郷単体でも観光資源としての価値はそれなりに高い。
- ◆ 大東市の歴史的資源の中でも特異的にエンターテインメントの可能性を持っている。
- ◆ ただし、関西エリアで見ると強力なNo.1競合も、隣接する身近な競合も存在する。
- ◆ 水郷、乗船という、御領の持つ魅力一点で争うのではなく、大東の持つ他の歴史的資源との総合力で 価値を高め、来街者を引き付けて行くことが望まれる。

Ⅸ・豊かな集落の風景

⑭新田開発の遺構・平野屋新田会所跡

- 新田開発は大東市にとって、現在の発展に直結している、いわば現在の大東市発展の原点とも言うべきものである。しかし、新田開発の遺構は、それが 芸術や宗教と関わりなく、通常の生産活動としての農村の暮らしの中で長年に渡り使い続けられてきたものであり、戦後の農地改革や著しい都市化の進行により、単に使わなくなった古いものとして認識され、経済活動が優先され、歴史的資源という評価が定着していなかった時期があり、急激に失われて行ったため残されたものはそれほど多くはない。
- 平野屋新田会所は、まさに残された僅かながらの記憶を繋ぐシンボルとなり得るものと考えられる。
- 宝永元年（1704）に実施された大和川付け替えで、大和川旧河道や深野池・新開池の新田開発が可能になり、東本願寺難波別院がその権利を得た後、開墾を進め正徳三年（1713）に完成させた。その内の深野南新田と河内屋南新田を譲渡されたのが平野屋又右衛門。この平野屋によって新田の維持管理の為に設置されたのが平野屋新田会所で、新田開発当初からおかれていたと考えられている。
- 会所とは新田経営の為の出先機関であり、現地に支配人を置き、経営事務や農民からの小作料の徴収、田畑、水路、樋門、道路、橋、等の管理や村の寄り合い、小作人との接触、さらには宗門改めまでに用いられてきたという。
- 平野屋新田会所は、東西90m（坐摩神社まで含めると120m）、南北60mの敷地にそれらの事務所機能と迎賓館的機能を持つ主屋と米蔵や道具蔵、庭園、屋敷神である坐摩神社、物資の搬入の為に銭屋川に面して設けられた船着き場など、江戸時代の建物群が土塀と堀跡に囲まれていた。



取り壊し前の平野屋新田会所（長屋門）



土蔵/米蔵（昭和30年頃）



主屋棟/座敷棟

- 現状では坐摩神社以外の地上部分の建物はすべて取り壊され、すでに大部分の土地は宅地開発が行われ戸建て住宅が建っているが幸いその一部分（476㎡）の土地が公有地化されている。
- そこは、米蔵、道具蔵の遺構が残り、船着き場遺構も存在する一角で、平野屋新田会所の記憶を残すことが可能と考えられる。
- 学術的には、平野屋新田会所の同時代記録である「平野屋会所文書」は、会所の歴史を解明する基本的資料として貴重な歴史的資源であり、将来的に平野屋新田会所への関心が高まるような物語の提供が期待できる。
- 深野新田・深野北新田の維持管理の為に設置された深野会所は、残念ながらその遺構は残っておらず、現在では屋敷神だっとおもわれる両皇大神宮のみがまつられ残っており、深野会所跡を示す石柱すらないようだ。
- 新田開発の遺構として樋門がある。平野屋新田会所周辺 1 Kmをみても 8カ所の樋門があるが、そのほとんどは、特にそれを歴史的資源として提示するような標識などが付随してはいないようである。



船着き場跡

発掘調査風景



平面図



深野会所跡地
(両皇太神社)



- そもそも、樋門が設置されている川や井路そのものが、新田開発の歴史的資源である。更には言えば開発された田畑こそが新田開発の歴史的資源である。
- 寝屋川を始め、細い井路に至るまで、大東市に豊かな集落の風景を形成してきた歴史的資源であり、これらが大東市に 人を呼び、大東市民に誇りと勇気を与えてくれるようなものになるような使い方を考えるべきものなのだろう。
- 残念ながら現在のところ歴史的資源と見なされている、新田開発に伴う近世インフラの類は僅かである。
- 特に開発された新田などは、どんどん消滅している。
- その見直しと活用はこれからの課題だろう。

銭屋川「さんだんもの樋」



新田開発の歴史的資源 井路

まとめ

- ◆豊かな集落の風景 新田開発の遺構、歴史的資源として機能するのは平野屋新田会所のみである。
- ◆但しそれを以ってして、新田会所というカテゴリーでインバウンドを望むには、一般大衆の関心を集めるだけのインパクトを持たせる工夫が必要であろう。
 - 新田会所の学習ならば、本宅まで完全に残した鴻池新田会所が活発に行っている。競合は強力である。
- ◆平野屋新田会所という、一つの歴史的資源で人を呼び込んだり、市民に誇りを感じてもらうのではなく、大東の持つ他の歴史的資源を組み合わせた総合的な価値を高め、人を引き付けて行くことが望まれる。
- ◆また、近隣の会所関連施設との事業連携についても検討を行っていく。

X・歴史ある野崎観音

⑮福聚山慈眼寺

- 野崎観音慈眼寺だけを別項に立て、他の時代に則したテーマと分けたのは、やはりそれだけ野崎観音が強力なコンテンツであるからである。
- 創建時の伝説から、中興の祖の再興、戦火による没落と繁栄など、時代の波を被りながら、営々と信仰の灯を繋いできた、時代を超えたコンテンツである。
- 時代区分を視点にしたクラスタリングとなじまないばかりでなく、現代においても、野崎まいりに留まらない観音信仰の道場として現役の宗教施設であり、かつ多くの参拝者と観光客をひきつける力を持っている。
- 野崎観音は、正式名称、福聚山慈眼寺。現在の宗派は曹洞宗だが、そもそもは天平時代、野崎の地を見たインド僧が、釈迦が初めて仏法を説いたサルナートに似た良い土地であることを行基に伝え、それに触発された行基が十一面観音像を彫って安置した事が始まりであると伝えられている。
- その十一面観音を彫った木は、大和の国初瀬の長谷寺の十一面観音と同木であると伝えられている。
- 大和長谷寺の本尊十一面観音は、触れるものに祟るといわれ、初瀬川に放置されていた楠の巨木を霊力の高い神木と見た長谷寺の開基徳道上人が掘り出したものと伝えられる。
- 実はこの本尊と同木という伝承を持つ十一面観音像は鎌倉の長谷寺をはじめとして、幾つか全国に存在しており、野崎慈眼寺の観音もその一つということになる。
- 平安中期、摂津の江口の君という遊女が信心し、病気が平癒した彼女は報恩感謝の為、低地より現在地に寺坊を再建した。それを伝え聞いた参拝者が観音のご利益を求めて増加した。そのお寺の中興の祖、江口の君を祀っているのが江口の君堂。縁結び・安産・子授け・婦人病などに悩むあらゆる女性を守ると言う御利益がある。



奈良・長谷寺本尊十一面観音



慈眼寺本尊十一面観音（秘仏）



江口の君

X・歴史ある野崎観音

⑮福聚山慈眼寺

- また鎌倉時代の永仁二年（1294）沙弥入蓮と秦氏が主君と両親の追善供養の為に、石造九重層塔を建立したものが今も残り、北河内最古の層塔となっている。
- 室町時代の野崎観音の逸話は見いだせない。
- 室町後期、戦国時代には、お寺に近い飯盛山に天下人三好長慶が城をかまえた。三好・松永と慈眼寺との関係は、三好長慶没後の混乱期の騒乱が大きく取り上げられるが、飯盛城を居城とした長慶と慈眼寺の間にも関わりがあったと思われる。文化人でもあり、宗教に理解を示した三好長慶との間には良い関係があったことが想像できる。
- 三好長慶の故国で、彼も大いに関わった阿波の長谷寺も、大和の長谷寺と同木の本尊を持つと伝えられている。長慶も、阿波と飯盛・野崎を繋ぐその不思議な縁に何かを感じただろう。
- しかし、永禄八年（1565）畠山と三好・松永の戦いの中で、慈眼寺は焼き討ちに逢い全焼。本尊だけが残るといふ災禍に逢う。この時点から、安土桃山時代には、慈眼寺は地上から消えていた。
- 豊臣が滅び、戦の心配がなくなった元和二年（1616）、青巖和尚が曹洞宗のお寺として復興した。
- さらに元禄、宝永頃から盛んになり始めた野崎まいりは、観音堂の落慶法要としての無縁経法要と秘仏の十一面観音像の開帳で、浄瑠璃や落語などに取り上げられるほど人気を博した。
- 境内にはお染・久松の比翼塚があり、悲恋を思い出させる絵物語もある。
- このように、各時代に野崎観音は奇跡を起こしたり、有力者をひきつけたり、大衆の人気を博したり、様々なエピソードを提供し役割を果たしてきた。

石造九重層塔



徳島鳴門長谷寺 本尊



お染久松比翼塚

X・歴史ある野崎観音

⑮福聚山慈眼寺

- このような中で、更に野崎観音のネームバリューアップを図り大東市に集客することは、第一に慈眼寺のプロモーションになるので自治体が行うのはなかなか与し難いし、できたとしても本来慈眼寺の意向と異なるものは手が下せない。
- だとしても、お寺との意向が合うことが前提だが、例えば以下のような戦略で、特に若年女子の大東市への来街拡大を図ることができるかもしれない。
- 特に若い女子の集客には美容と恋愛といったテーマが強い誘因となりうる。
- お染久松の碑を、許嫁のお光も含め「かなわなかった恋」のシンボリックなものとし、ここに線香をあげ、過ぎた恋を弔い、新たな幸せを江口の君に願掛けする、といった、新しい祈りの習慣をお寺としてアピールすることで、野崎観音を女子再生スポットとして認識させていくような施策があるとさらなる飛躍が描けるかもしれない。
- ただし、先にも述べたが、現在の福聚山慈眼寺は、ある意味、野崎まいりというイベントをもつエンターテインメントスポットであり、その集客力は無視できないものがある。
- 新たなターゲットにしる、既存の参拝客層にしる、慈眼寺にお参りし、野崎観音の歴史を知るだけでは、大東市域への関心や再来訪、或いは市民であれば大東市への誇りに繋がらず、野崎観音だけで終息してしまう恐れが大きい。
- 野崎観音の歴史から大東市域の歴史へ、関心を拡大させ、奥深さを知ってもらったり誇りに思ってもらう必要がある。
- その為には、野崎まいりと新田開発や、十一面観音と飯盛城の三好長慶といったように野崎観音の歴史と他の大東市域の歴史コンテンツとを関係づけ、関心を転嫁させる物語作りが必要である。



野崎まいりのイベント

まとめ

- ◆野崎観音は、奈良時代、天平時代、平安時代、鎌倉時代、戦国時代、江戸時代と、様々な時代に渡ってエポックが存在する、長い歴史を持つ、それだけで集客力が現在も高いコンテンツである。
- ◆お寺側との意向が合致すれば、例えば江口の君やお染久松比翼塚といった周辺コンテンツを使って、新たな祈りの習慣を提案し、若年女子といったターゲットを攻略していくことができるだろう。
- ◆但し、特に野崎まいりは、歴史的資源としてよりも、現代の楽しみ、レジャーを提供し、集客を得ている。
- ◆歴史教育の視点からは若干さみしいが、人は、楽しくないものにひきつけられない。楽しいものに親しみ、その後、歴史があることを知るというアプローチも、ある意味全く正しい効果的なものである。
- ◆但し、野崎まいりに来て楽しい思いをし、加えて野崎観音の歴史を知るだけでは、大東市域への関心や再来訪、或いは市民であれば大東市への誇りに繋がらず、野崎観音だけで終息してしまう恐れが大きい。
- ◆野崎観音の歴史から大東市域の歴史への関心や奥深さを知ってもらったり誇りに思ってもらうには、野崎観音の歴史と、他の大東市域の歴史コンテンツとを関係づけ、関心を転嫁させる物語作りが必要である。
- ◆野崎まいりと新田開発や、十一面観音と飯盛城の三好長慶といった形で、様々なテーマ、物語に野崎観音慈眼寺の持つコンテンツを利用しつくすことで、大東市への関心を高めることに寄与できると思われる。

歴史的資源(コンテンツ)の物語化とその評価と指針 まとめ表

時代	大テーマ	テーマ	物語	現状	判断	個別指針(可能性)
① 古代	古代から開けた水辺の邑	I・曙の記憶	①旧石器～弥生期 大東市域に人が住み始めたころの記録	大東市域では先史時代の早期からの多くの重要な遺物が出土しているが、スタンダードなもので、大東市域の古代という個性的なストーリーを描くのは難しい。	但し大東地域が太古を通じて人が住み続けてきた豊かな土地であったことは、この地域に今住む人々に於いても重要な大東市域の歴史といえる。	現在大東市に住む市民に対し、大東市域が古代から豊かな土地であったことを知ってもらえるような教育的な利用の為の整備を進めて行くことが望まれる。
		II・古代王権との関係	②古墳時代の大王政権と、この地の古代豪族の関係	堂山1号墳の埋葬者が河内王権と渡来人にも関係の深い有力豪族で、王朝の渡来人コーディネーター的な人物だったとすると、5世紀前半の大東市域が、有力豪族と渡来人が活躍する最先端地域であった可能性に繋がる。	枚方、四條畷など北河内の他地域の渡来人遺跡と連携することで、古代史の中で堂山古墳群の価値が、例えば「有力豪族と古代渡来人遺跡群」として大きく向上する可能性がある。	他地域との連携で、この地の豪族と渡来系氏族と堂山古墳の関係のある程度精緻化していくアプローチが求められる。
		III・中央の威令	③律令制の痕跡	大東市域は奈良盆地に成立した中央政権とも距離が近いばかりでなく、奈良と海を結ぶ水上交通のルート上にあり、比較的早くから中央政権の威令が行き渡っていたと思われる。	その痕跡としては条里制の地名くらいしか残っておらず、具体的な文化財と言えるものはない。	学術資料の整備や、現地案内板等の整備の可能性を考える。
② 中世	東高野街道	IV・戦の道	④四條畷の戦いを巡って	「四條畷の戦い」は華々しい歴史的光彩を放つエピソード。市内に残っていた「ハラキリ」「古戦田」等の地名は、現住居表示にはない。楠木一族のコンテンツは現状では注目されていない過去のコンテンツ。	現状の遺跡での集客や、一挙に大東市を「四條畷の戦い」の舞台に変えるのは難しいが、こちらの主張を、少なくとも現場に残すことで、折に触れアピールすることで徐々に変化させることは可能だろう。	今後、地名の記憶が消えて行く可能性を考えると、地域の歴史として残すために、記念碑や解説版など「ここでその戦いがあった」ことを示すようなシンボルは望まれる。
			⑤飯盛城と三好長慶の時代	飯盛城は信長に先んじた天下人三好長慶が、天下の諸政を執った天下城。飯盛城は規模が大きく、遺構がよく残った戦国山城として第一級の遺跡。飯盛・北河内は大和川で海へ繋がるキリシタンが繁栄した当時最先端地域	三好長慶の飯盛城は、野崎城や三箇城、三箇キリシタン等と繋げて、「織豊時代を先取りして繁栄した戦国時代の最先端地域、飯盛北河内」の物語を紡ぐことが、知られていないからこそ可能である。	「飯盛城跡、三好長慶、河内キリシタン」の研究と整備を進める【ハード】 人々に「飯盛城の三好長慶とキリシタン」の最先端物語を浸透させる【ソフト】 ハード、ソフトの両輪を同時に回しピックアップとインバウンドを獲得する。
	北堤横河内街道	V・集落の信仰をつなぐ道	⑥山の辺の集落の氏寺・氏神	東高野街道に沿った集落に中世からあり続けた寺社は、集落の繁栄を守り、その集落の人々の往生と来世を願った、集落の氏神、氏寺である。	「氏寺氏神」は、現代化された集落の中で日常的な風景になり、価値は高くない。但し集落の者にとって、社寺は戦国期から近世、近代に発展した集落の歴史とともにあった、一体感のシンボルとなる。	観光化の資材として使うのではなく、神社と祭礼、寺院と墓参や縁日などの集落の風習や行事とともに、「歴史的背景とともにある生活風俗資産」を次世代に伝承し、集落を活性化するシンボルとして利用する。
			⑦淵の辺の集落の氏寺・氏神	中世の古堤街道沿いの社寺も、里人の勧誘によって祀られた国づくりの大本の神々や、平安から何らかの宗派に属していた寺であり、集落の里人の氏神、氏寺として集落の繁栄を守る、集落の為のものである。	東高野街道沿いの中世の社寺同様、一般的にいう歴史的資源としての価値は、残念ながら決して高くない。やはり集落に暮らす者にとっても、その集落の一体感のシンボルとなる	その集落の一体感のシンボルとなる「集落の歴史的背景とともにある、現在進行形の生活風俗資産」として、信仰や風俗を継承してわがまち、ふるさと大東の意識を高め集落の活性化に活用していくような利用が求められる。
	豊かな暮らしへの歩み	VII・豊かな暮らしへの祈り	⑨治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神	この時期の大東市域の寺社は、戦が止み安心して生産に励み、豊かさに向って歩み出した農民たちが日々の安穏と来世の往生を願った寺や、水害や水不足から逃れるために雷神や水神への信仰を深めた神社である。	人を呼べる目に見える価値を比べると、見るべき歴史や造作物のものもあるが、特別高いわけではない。しかしその集落にとっては特別な氏寺、氏神であり、一体感のシンボルとなるものである。	その歴史とともに伝統行事、習俗を伝え、一体感を体感するとともに、豊かに発展してきた集落の歴史を認識することで、誇りある集落としての活性化に利用していく。
			⑩神々とともに豊作を喜ぶ＝だんじり	大東市のだんじりは、「集落の氏神とともに豊作を奏ぐ」農村型神事の原型を色濃く残すもの。	大東市のだんじり祭り、岸和田のだんじり祭りは、全く異なる祭りであり、比べるべきものではないのだがどうしても「だんじり祭り」として一括して見られてしまいがちで、比べられると、NO.1にはなれない。	大東のだんじりを「威勢の良さを誇る町衆だんじり」とは違う「集落と神々との交歓」の素朴な農村だんじりのNo.1に位置付け「豊作を神と共に奏ぐ神事」という価値の本質を啓発し魅力をより高めインバウンドを獲得する。
VIII・賑わう往来の記憶		⑪交通の繁栄とおかげまいり	大東市には、人心が安定し経済が向上し、往来が活発になったこのエリアの歴史を示す、おかげ灯籠や道標など、人々の往来に伴って建てられた石造物が多く残る。	古堤街道や東高野街道の現状は、街道の魅力を伝えるには難しく、おかげ灯籠や道標も鑑賞物にはなり難いが、痕跡であり過去の記念碑として、移動や街道のにぎわいを記憶に残すやすがとなり得る。	おかげ灯籠や道標は、近世のこの土地が交通上の要路であった証であり、大東市の発展の歴史の大きな物語の物語として活かしていく。	
		⑫野崎まいり	江戸時代大評判を呼び、多くの人が押し寄せた十一面観音の短期御開帳。参詣だが、日帰りができる距離で舟でも行き来できる、気軽な庶民のレジャー。今なお二十万人以上の人出がある巨大集客装置。	但し、屋台には来ても、野崎観音の謂れに関心なく、参詣もしない者も多そう、ましてや大東市への関心などはない。	屋台にしか関心を示さない客を、正しい参詣ルートでの野崎まいり体験などで、野崎まいりの謂れの認識を進め、さらに野崎観音の歴史から大東市域の歴史へと関係づけて、大東市へ関心を転嫁させるストーリー作りを行っていく。	
IX・豊かな集落の風景	IX・豊かな集落の風景	⑬水郷	御領の水郷風景は、風景として古い町並みが残されており、ビジュアル性が高い。時間的には限られるが、舟乗乗船、庄屋敷見学など、体験性が高く楽しめる。	御領の水郷風景は、大東市の歴史的資源の中でも特異的にエンターテインメントの可能性を持っている。単体でも観光資源としての価値は高いように思われるが、強力なNo.1競合も、身近な競合も存在する。	水郷、乗船という、御領の持つ魅力一点で争うのではなく、大東の持つ他の歴史的資源との総合力で 価値を高め、来街者を引き付けて行くことが望まれる。	
		⑭新田開発の遺構	豊かな集落の風景 新田開発の遺構、歴史的資源として機能するのは平野屋新田会所のみである。	但しそれを持ってして、新田会所というカテゴリーでインバウンドを望んでも、単独で一般大衆の関心を集めるだけのインパクトのある情報にはならないだろう	平野屋新田会所という、一つの歴史的資源で人を呼び込んだり、市民に誇りを感じてもらえるのではなく、大東の持つ他の歴史的資源とを組み合わせた総合的な価値を高め、人を引き付けて行くことが望まれる。	
通期	X・歴史ある野崎観音	⑮福聚山慈眼寺	慈眼寺は長い歴史を持つ、集客力が現在も高いコンテンツ。寺側が望めば若年女子層を取り込む新しい祈りの習慣形成は可能だが、現状の野崎まいりは、歴史的資源としてよりも、現代のレジャーの提供で集客を得ている。	楽しみ親しみ、その後に歴史を知ることが効果的なものであるが、野崎まいりに来て楽しい思いをし、その歴史を知るだけでは、大東市域への関心や大東市への誇りに繋がらず、野崎観音だけで終息してしまふ。	野崎まいりと新田開発や、十一面観音と飯盛城の三好長慶といった形で、野崎観音の歴史から大東市域の歴史へと関係づけ、関心や奥深さを知ってもらったり誇りに思ってもらい、関心を転嫁させるストーリー作りを行っていく。	

第四章

15の物語の活用可能性評価のまとめ、注力度評価

先に示した15の物語を評価し、その重要性と今後の整備における方向性について評価を加える。

1. 時代、地域、カテゴリー、内容、特長の特性に従って主要な個別資源を整理。
2. テーマに従って、個別資源を複数の物語に括る(エディション)。
3. 括った個別資源を連動させて、コンテンツとしての価値を高められる物語を構築する。
4. 物語を活かして、利用活性化の方向を明示する(イン&アウトバウンド、インナーへの利用方向)。
5. 物語がより活かされるように、各個別資源の望むべき整備の方向性を示す。

この章での作業

6. 活用可能性を対し、イン&アウトバウンド、インナーへの効果が高さを基準にプライオリティを評価する。場合によっては、物語を連動させ、より大きな物語を構築し、個別の資源価値ではなく、物語の総合力でより高い魅力付けを図る。

活用可能性評価と注力度についての考察(古代から中世)

古代

【Ⅰ・曙の記憶】→市民の文化・教養レベルの向上の為の生涯学習的利用に留まる〈×〉

重要な遺物が多いが一般の注目やインバウンドが得られるインパクト性は薄い。研究や展示等の生涯学習的利用の推進に留まる。

【Ⅱ・古代王権との関係】→被葬者に有力豪族が特定でき信憑性が高まればインバウンドも期待できる〈▼〉

堂山古墳の被葬者を「河内王権と渡来人のコーディネーター」といった性格の有力豪族に特定するなど、広く関心を持たれるレベルで、ある程度その説に信憑性が得られれば、「有力豪族と渡来系関連遺跡」としてインバウンドの獲得も可能になる。

【Ⅲ・中央の威令】→市民の記憶から消さないための生涯学習的利用に留まる〈×〉

律令制の痕跡は地名程度にしか残されておらず、現地での確認もできない。現地案内板や生涯学習活動等などの推進に努める。

中世

【Ⅳ-④四條畷の戦い】→現状では、現地案内板や生涯学習など基本整備を図り、機会があればPRに発展させたい。〈×〉

四條畷の戦いの痕跡と考えられる地名も、現在の住居表示にはなく、市民の記憶からさえ消えかねない。現地案内板や生涯学習活動から整備して市民の文化・教養レベル向上を図り、楠木一族の物語に脚光が当たるチャンスに、古戦場争いでPRを図る。

【Ⅳ戦の道-⑤飯盛城と三好長慶】→人気の戦国時代の知られざる壮大な物語で、インバウンドとシビックプライドを獲得できる。〈◎〉

飯盛城は、信長に先立つ戦国の覇者三好長慶が城主であった戦国山城第一級の遺跡である。舟で堺から海外へと繋がりキリシタンも繁栄した、当時の最先端地域の壮大な戦国物語を紡げる。現在はあまり知られていないが知られば関心を得られる。

市民に知られることでシビックプライドを喚起するばかりでなく、それを核に文化的・商業的、観光的イベントなどの実需にも繋がる。

大衆人気の高い戦国物語であり、良く残る城跡の整備を利用して、それを核にインバウンドを獲得する発信ができる。

【Ⅴ・集落の信仰を繋ぐ道】→中世から集落とともに生きてきた社寺のシンボル性を利用し、シビックプライドの向上に活用する。〈△〉

街道は集落を繋ぎ、集落の社寺を繋ぐ。社寺は中世から集落とともにあり、繁栄と来世を願った氏寺・氏神で、一体感のシンボル。

現代的日常風景となっており、観光化の資材にはなり難いが、歴史的背景を伴う集落の生活風俗の継承を支えて、郷土意識、あるいは集落のシビックプライド向上を図ることに活用する。

【Ⅵ・龍間越 祈りの道】→スピリチュアルな宗教的雰囲気を利用し、物語の口コミが生まれればインバウンドも獲得可能。〈▼〉

龍間道は、行者信仰や龍神伝説のスピリチュアルな雰囲気を残す特異的な宗教的歴史的資源の色濃いエリア。現代のパワースポットの扱いをすることで、ミステリアスな空気を醸し出せる。行者信仰・龍神信仰に基づくパワースポットを巡り邪気を払い観音に願い事をすれば叶うといった、コンテンツを回遊する物語を設計し、小冊子や回遊証を用意してインバウンドを獲得する。

古代から中世に於いては「飯盛城と三好長慶」の物語はインバウンドとシビックプライドの両方を獲得を期待できるビッグコンテンツになる可能性が高い。さらに近世まで見ても、これほどの可能性を持つものはなく、現段階では中期的に、計画的に、このコンテンツに注力して成長を図るべきである。生涯学習の為の学術的な整備を核に、その成果を待たずして市民の間に認識を浸透させ期待を抱かせ、市外との連動やP Rを積極的に行って、コンテンツの成長を促進させていくことが期待される。

古代・中世における各物語の現状・判断・指針及びインバウンド評価のまとめ表

時代	大テーマ	テーマ	物語	現状	判断	個別指針(可能性)	インバウンドとシビックプライドにおける評価
① 古代	古代から開けた水辺の邑	I・曙の記憶	①旧石器～弥生期大東市域に人が住み始めたころの記録	先史時代の早期からの多くの重要な遺物が出土している。	学術的に貴重。住民には郷土の歴史として重要。一般の注目を集められるほどのインパクトは薄い。	市民に対し、生涯学習的な利用のための整備を進めて行く。	市民の文化・教養レベル向上のための生涯学習の利用に留まる。 ×
		II・古代王権との関係	②古墳時代の大王政権と、この地の古代豪族の関係	現状は被葬者不詳だが、河内王権と渡来人にも関係の深い、王朝の渡来人コーディネーター的な人物だったとすると、この地域が、渡来人が活躍する最先端地域であった可能性がある。	他の北河内渡来人遺跡と連携し堂山古墳を「大王側の渡来人コーディネーター的有力豪族の墓」として位置付けられれば、価値が大きく向上する	他地域との連携で、有力氏族や渡来系氏族と堂山古墳の関係を学術的に探究していくアプローチが求められる。	物部・大伴氏クラスの有力豪族と特定し、学術的にも信憑性が高まれば、他地域と連携したPRができ、インバウンドとシビックプライドの向上を期待できる ▼
		III・中央の威令	③律令制の痕跡	中央政権の威令が行き渡っていたと思われるが、その痕跡としては条里制の地名くらいしか残っておらず、具体的な文化財と言えるものはない。	一般的な関心が高い分野でもなく、材料に乏しく、ハード、ソフトでの盛り上げは難しい。	学術資料の整備や、現地案内板等で市民の記憶からは消さない事が望まれる。	市民の文化・教養レベル向上のための生涯学習の利用に留まる。 ×
② 中世	北河内の経系 東高野街道	IV・戦の道	④四條畷の戦いを巡って	楠木一族の話は現代には必ずしも受けが良くないが、歴史的な光彩を放つ華々しいコンテンツ。市内残っていた地名も現住所表記ではなくなった。	コミックなどで楠木一族や高師直の再評価があれば別だが、単独での価値向上は困難。地名の記憶は消えてしまう危険が大きい。	地域の歴史として残すために、記念碑や解説版といった表示は望まれる。	現状では市民の文化・教養レベル向上のための生涯学習の利用に留まる。 ×
		V・集落の信仰をつなぐ道	⑤飯盛城と三好長慶の時代	飯盛城は川で海へ繋がるキリシタンが繁栄した当時最先端地域で、信長に先んじ三好長慶が天下の諸政を執った天下城。規模が大きく、遺構がよく残った戦国山城として第一級の遺跡。	三好長慶の飯盛城は、野崎城や三箇城、三箇キリシタン等と繋げて、「織豊時代を先取りして繁栄した戦国時代の最先端地域、飯盛北河内」の物語を紡ぐことが可能である。	「飯盛城、三好、キリシタン」の研究と整備 ・飯盛城の三好長慶とキリシタンの物語浸透 ・上記の両輪を同時に回しシビックプライドとインバウンドを獲得する。	大衆に人気が高い戦国時代の物語。海外まで巻き込む壮大な話で、天下取りの主流に先立つ知られざる話。知られさえすれば注目される。城跡が良く残り発信の核になる。 ◎
	北河内の横糸 古堤街道		VI・龍間越祈りの道	⑥山の辺の集落の氏寺・氏神	街道に沿った集落に中世からあり続けた寺社は、集落の繁栄を守り、人々の往生と来世を願った、氏神、氏寺であるが、現代化された集落の中で日常的な風景になっている	集落外の者にとってはよくある社寺だが、集落の者にとって、社寺は戦国期から近世、近代に発展した集落の歴史とともにあった、一体感のシンボルとなり得る。	神社と祭礼、寺院と墓参り縁日などの集落の風習や行事とともに、「歴史的背景とともにある生活風俗資産」を次世代に伝承し、集落を活性化させるシンボルとして利用する。
		⑦淵の辺の集落の氏寺・氏神		⑧修験道と龍神信仰	生駒山と飯盛山の鞍部にある龍間集落は、龍神信仰と不動明王信仰、役行者信仰などの修験道や浄土信仰に関わる特異的な宗教的 歴史的資源が色濃く集中しているゾーンである。	従って、龍間を現代まで続く、修験道や龍神信仰のような、若干ミステリアスな宗教的な色彩が強い空間としての空気を醸し出すことが可能な地域と考えられる。	現代まで続く、「不思議な力が得られるパワースポット的なエリア」という物語を創成できるベースがあり、今日的なインバウンドマーケットを取り込める可能性があるだろう。

◎ = 強いインバウンドの獲得と高いシビックプライドの形成が期待できる ○ = インバウンドとシビックプライドの獲得が期待できる

▼ = 条件が整えばインバウンド獲得も期待できる ▲ = シビックプライドの形成が期待できる × = 現状では生涯学習の利用に留まる

活用可能性評価と注力度についての考察(近世)

近世

【Ⅶ-⑨治水と豊作を祈る集落の寺社】→集落には特別の氏寺氏神のシンボル性を利用し、シビックプライドの向上に活用する。〈△〉戦が終わって生産に励み、繁栄と来世を願った氏寺・氏神で、一体感のシンボルとなるが、現代的日常風景化し、観光化の資材にはなり難い。集落の生活風俗の継承を支えて、郷土意識、あるいは集落のシビックプライド向上を図ることに活用する。

【Ⅶ-⑩神々と豊作を寿ぐ・だんじり】→豊作を神とともに寿ぐ神事のだんじりNo.1に位置付けて、インバウンドも期待できる〈○〉大東のだんじりは、岸和田の町衆が威勢のよさを競うだんじりとは異なる神とともに豊作を寿ぐ素朴な農村のだんじり。そのNo.1と位置付け、哀愁を帯びたお囃子や、宵祭りの美しさなどを伝えることで、インバウンドの獲得も可能になる。

【Ⅷ-⑪交通の繁栄とおかげ灯籠】→現状では表示もないことが多い。市民の認知を得るところから始める〈×〉道標やおかげ灯籠は、人心が安定し生産が高まり大東市域の交通が盛んになって行った繁栄の証し。しかし、現代化した街道の脇や社寺の境内で、表示もなく顧みられないものも多い。まずその意味を市民に伝え、教養を高め、シビックプライドに繋げる。

【Ⅷ-⑫野崎まいり】→野崎まいりクルージングなどの大掛りな仕掛けで参拝客拡大も図れるが、基本は野崎観音を利用し参拝者に大東に関心を持ってもらう〈▼〉

野崎まいりは既に確立したレジャーで参拝客数も巨大。これを利用して大東市の歴史への関心を持たせられるような仕掛けを考える。特に野崎まいりが華やかな頃の屋形舟の復活などできれば、大東の歴史にも触れられる上、PR力もあり参拝客数拡大にも結び付く。

【Ⅸ-⑬御領の水郷】→風景や体験など観光潜在力は高く、今後の改善は可能。現状は他の物語と合体でインバウンドを獲得〈○〉水郷風景や田舟体験などエンターテインメントの可能性が高いが、まだ改善できるポイントが多い。現状では、だんじりや新田開発遺構などと合体化し「心休まるふるさと大東」を形成する一つの要素として、総合力でシビックプライドとインバウンドの獲得に活用する。

【Ⅸ-⑭新田開発の遺構】→平野屋新田会所跡を他の物語と協働させ「繁栄する農村・大東」の核としてインバウンドに繋げる。〈○〉新田開発遺構と呼べるのは平野屋会所跡しかないが、「新田が作ってきた繁栄する農村」大東のコアコンテンツ。市民の誇りの源泉であり、他の物語と協働してインバウンドが得られる象徴的存在。整備と認知浸透をしっかりと行う。

通期

【Ⅹ・歴史ある慈眼寺】→野崎の歴史を利用し大東市の歴史への関心拡大に転嫁できる物語で大東へのインバウンド獲得〈▼〉

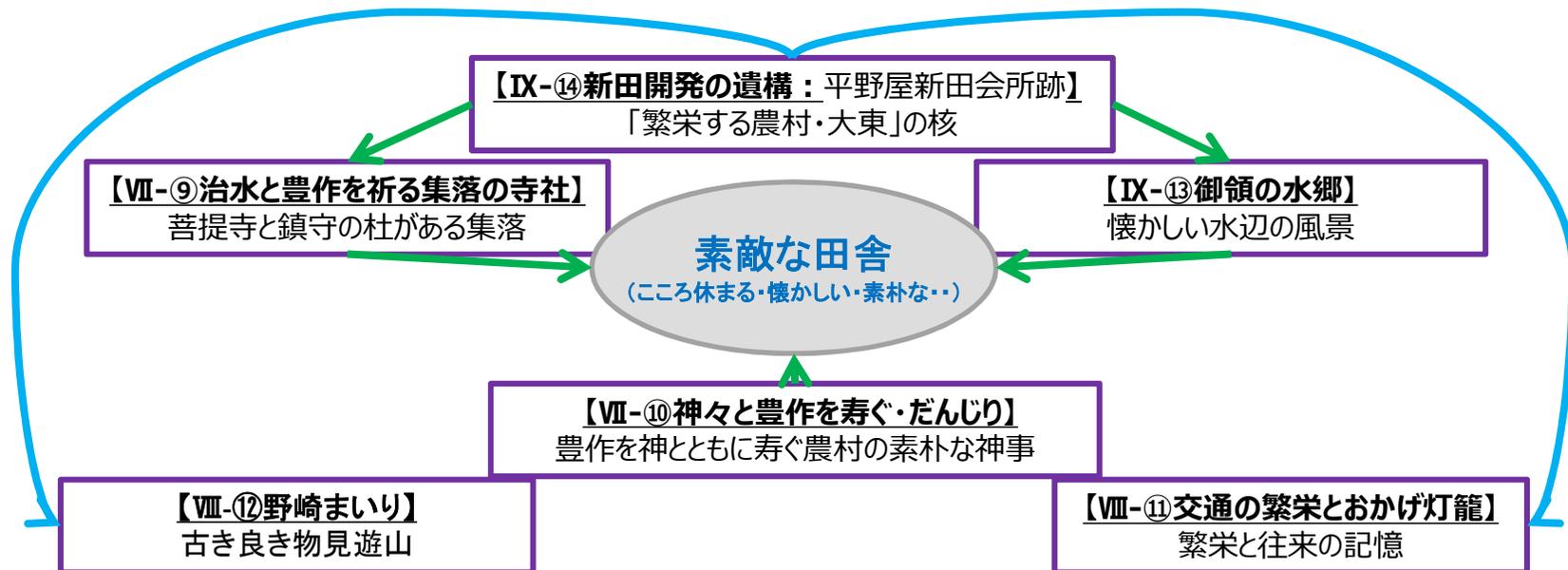
慈眼寺は奈良時代から現代に至るまで、幾つもの人々の関心を誘うコンテンツを持ち、現在でも多くの参詣客を集客している。

お染久松と江口の君のバック詣のような、新しい祈りに依る新規顧客獲得もあるが、現在の客に野崎まいりと新田開発、三好の長谷寺との因縁、観音建立の行基の龍伝説といった大東に関連した物語を提供し、大東市に関心を持たせることでも充分効果的だと思われる。

近世や通期には突出した強力な物語やビッグコンテンツがない。

活用可能性評価と注力度についての考察(近世)

- 近世には突出した強力な物語やビッグコンテンツがない。
- しかし、あらゆる物語に「新田開発に依る繁栄する農村への進化」という一つのテーマが見える。
- それは市民にとって、近世以降の、新田を基盤とした豊かな農業地帯を人の知恵と力で作ってきた歴史である。そしてそれは、この土地に住む人々のシビックプライドに繋がる豊かな物語である。
- 加えてインバウンド獲得の視点で、近世の具体的な個別物語が現代にもたらす価値を再度見直して見る。



大東市は「北新地から17分を着く素敵な田舎。こころ休まる故郷の風景。」という価値を持ち得る。

- 大東市民にとって、近世以降の「新田開発を基に繁栄してきた農村地帯」の物語は、この土地に住む人々にとって、豊かな農業地帯を人の知恵と力で作ってきたシビックプライドに繋がる大きな物語である。
- 市民以外に対しては「北新地から17分を着く素敵な田舎」という価値でインバウンドを期待できる。
- 但し、現状でそれを訴求してインバウンドを得ると言うよりも、それぞれの物語に「大東市は素敵な田舎だ」と市民がその価値を認めるような市民への共感を図り、市民の評価が外部に伝わるような形が効果的と思われる。

近世・通期における各物語の現状・判断・指針及びインバウンド評価のまとめ表

時代	大テーマ	テーマ	物語	現状	判断	個別指針（可能性）	インバウンドとシビックプライドにおける評価	
③ 近世	豊かな暮らしへの歩み	Ⅲ. 豊かな暮らしへの祈り	⑨ 治水と豊作を祈る集落の氏寺・氏神	戦国が収まった後の社寺は、ようやく安心して生産に励み出した集落の農民たちが雷神や水神を祀り、水の不安から逃れ、安穏と往生を願って祈念した大衆の為の社寺である。	歴史や造作物にも見るべきものもあるが、社寺単体でのインバウンド獲得は期待困難。但し中世の社寺と同様集落にとっては特別な氏寺、氏神であり、一体感のシンボルとなる。	その歴史とともに伝統行事、習俗を伝え、一体感を体感するとともに、豊かに発展してきた集落の歴史を認識することで、誇りある集落としての活性化に利用していく。	観光化の資材として使うのではなく、集落のシビックプライドを高め、市民のこの土地への誇りを活性化することに活用できる。	△
			⑩ 神々とともに豊作を喜ぶ＝だんじり	大東市のだんじりは、「集落の氏神とともに豊作を寿ぐ」農村型神事の原型を色濃く残すものである。	大東と岸和田のだんじり祭りは、全く異なる祭りであり、比べるべきものではないのだがどうしても「だんじり祭り」として一括して見られがちで、比べられると、NO.1にはなれない。	大東のだんじりを「威勢の良さを競う町衆だんじり」とは違う「豊作を神と共に寿ぐ素朴な農村だんじり」のNo.1に位置付けて、神事である魅力を高めインバウンドを獲得する。	哀愁を帯びたお囃子や、宵祭りの美しさなど、素朴な里人の祭りとして日本人の琴線に触れる要素は豊富。位置づけを変えることでインバウンドは充分見込める。	○
		Ⅳ. 賑わった往来の記憶	⑪ 交通の繁栄とおかげまいり おかげ灯籠	大東市には、人心が安定し経済が向上し、往来が活発になったこのエリアの歴史を示す、おかげ灯籠や道標など、人々の往来に伴って建てられた石造物が多く残る。	古堤街道や東高野街道の現状は、街道の魅力や伝説、おかげ灯籠や道標も鑑賞物にはなり難いが、過去の記念碑として街道のにぎわいを記憶に残すすがとなり得る。	おかげ灯籠や道標は、近世のこの土地が交通上の要路であった証として、大東市の発展の歴史の大きな物語の中で、物証として活かしていく。	現状では、表示もなく、市民にも認知されているか疑問。まず市民にその意義、意味を知らせることから始め、この土地への誇りを活性化につなげる。	×
			⑫ 野崎まいり	江戸時代大評判を呼んだ観音の短期御開帳での参詣は、舟でも行き来でき日帰りできる、気軽な庶民のレジャーだった。今も二十万人以上の巨大集客ができる。	但し、屋台には来ても、野崎観音の謂れに関心なく、参詣もしない者も多そうで、ましてや大東市への関心などはない。	屋台客を、正しい参詣ルートや船による野崎まいりの体験などで、野崎まいりの謂れの認識を進め、さらに野崎観音の歴史から大東地域の歴史への関心へと転嫁させていく。	野崎まいりクルージングの定期化などダイナミックな仕掛けができれば話題化でき、大東市の水運の歴史への理解も深まる。	▼
			⑬ 水郷	御領の水郷風景は、風景として古い町並みが残されており、ビジュアル性が高い。時間的には限られるが、田舟乗船、庄屋屋敷見学など、体験性が高く楽しめる。	御領の水郷は、大東市の歴史的資源の中でも特異的にエンターテインメントの可能性が高い。単体でも観光資源としての価値は認められるが、強力なNo.1競合も、身近な競合も存在。	水郷、乗船という、御領の持つ魅力一点で争うのではなく、大東の持つ他の歴史的資源との総合力で 価値を高め、来街者を引き付けて行くことが望まれる。	観光資産としての潜在力はある。田舟運航の定期化、辻本家の宅内見学、来街者の交通手段など、改善や魅力高揚は可能。現状でも他の魅力と抱合せて、効果を出せる。	○
		Ⅴ. 豊かな集落の風景	⑭ 新田開発の遺構	豊かな集落の風景 新田開発の遺構、歴史的資源として機能するのは平野屋新田会所のみである。	但しそれを持ってして、新田会所というカテゴリーで単独でインバウンドを望むには一般大衆の関心を集めるだけのインパクトをもたせる工夫が必要。	平野屋新田会所一つの歴史的資源で人を呼び込んだり、市民に誇りを感じてもらおうのではなく、大東の持つ他の歴史的資源を組み合わせた総合的な価値を高め、人を引き付けて行く。	単一資産だが「新田が作ってきた繁栄する農村」大東のコアコンテンツ。市民の誇りの源泉であり、他の物語と協働してインバウンドが得られる象徴的存在。整備と認知浸透をしっかり行う。	○
			⑮ 福聚山慈眼寺	野崎観音は、奈良時代からの長い歴史を持つ、現在も単体で集客力が高いコンテンツ。特に野崎まいりは歴史的資源としてよりも、現代の楽しみ、レジャーを提供し集客を得ている。	楽しみ親しみ、その後に歴史を知ること効果的だが、野崎を楽しみ、その歴史を知るだけでは、大東市域への関心や大東市への誇りに繋がらず、野崎観音だけで終息してしまう。	野崎まいりと新田開発や、十一面観音と飯盛城の三好長慶といった、慈眼寺の歴史と大東地域の歴史を関係づけ、大東市への誇りや、関心に転嫁させる物語作りを行っていく。	現参詣客への大東市の歴史への関心拡大施策を打てればそれでも充分だが、慈眼寺が(例：お染久松塚と江口の君のバック詣で等)新規客拡大開発に同意、訴求できればさらに大きくなる。	▼
通期	X・歴史ある野崎観音							

◎ = 強いインバウンドの獲得と高いシビックプライドの形成が期待できる ○ = インバウンドとシビックプライドの獲得が期待できる
 ▼ = 条件が整えばインバウンド獲得も期待できる △ = シビックプライドの形成が期待できる × = 現状では生涯学習的利用に留まる

總括
大東市 歷史的資源活用基本方針

大東市 歴史的資源活用指針の方向性

- 1・大東市は古代と近世初期に、水域の地勢条件が2度、大きく変わるという、非常に特殊な歴史を経てきた。
- 2・常に水とともにあり、人類が土器さえ持たない太古から、連綿と生活を続けてこられた豊かな地味の地域であった。
- 3・古代には河内南部の王権とも、北河内に居る高い技術を持つ渡来人とも強い関係を伺わせる先端地域であった。
- 4・また、中世以前の大東市域にも、現代に直接つながるものではないが、交通の要所として重要な役割や、激動の場を提供した、忘れられた過去、歴史がある。
- 5・特に飯盛城が三好長慶の居城であった時代、大東市域は、人やものが行きかたり、京都文化が流れ込んだり、新しいキリシタンの習俗が流れ込んだりした、先端地域であった。
- 6・その痕跡はいまや僅かに城跡が残されているにすぎない。これを整備し、伝承を整理、顕彰し、一つの物語として伝えて行くことで、この地域の市民ばかりでなく、他の地域の人々からも驚きと関心を持たれる可能性を持っている。
- 7・加えて、近世以降の、新田を基盤とした豊かな農業地帯を人の知恵と力で作ってきた歴史は、この土地に住む人々の誇りとなる豊かな物語を持っている。
- 8・この土地に暮らす者にとっては、新田による発展の物語は、現在を生きる誇りを与え、将来に繋がる勇気を育む。その為に、新田開発による近世の発展を今に伝える物語とそれを伝える事物としての歴史的資源を、市民に伝え広めて行くことは有用である。
- 9・以上のように大東市には、古代や中世の最先端地域として大いに発展繁栄した過去があるがあまり知られていない。
- 10・この知られざる繁栄の物語が他地域の人々には、その現場となった大東市域への関心と来街意向を高める。また来街者をもてなす物産や、サービスの振興を起こす活用へと繋がるだろう。
- 11・また、市民に於いては、はるか昔の最先端の繁栄の物語と、近世の人の知恵と力で豊かさを発展させた物語が、大東市に生きることへの関心と誇り、そして勇気につながるだろう。
- 13・大東市に存在する多くの歴史的資源を、「知られざる最先端の繁栄の物語」と、「近世の人の知恵と力で豊かさを発展させた物語」のコンテンツとして利用することで来街者に向けたインバウンド、アウトバウンドの拡大と、市民に向けたシビックプライドの形成に寄与させて行くものとする。

参考資料

総合

1. 大東市文化財マップ（大東市教育委員会）
2. 歴史散歩道大東（大東市教育委員会）
3. 大東市ふるさとカルタ（大東市教育委員会）
4. 大東市史 通史編（大東市教育委員会）

古代

1. 大東市立歴史民俗資料館常設展図録（大東市立歴史民俗資料館）
2. 大東市埋蔵文化財分布図（大東市教育委員会）
3. 中垣内遺跡と弥生文化の始まり（平野屋新田会所を考える市民講座）
4. 堂山古墳群史跡広場パンフレット（大東市教育委員会）
5. 堂山古墳群のひみつ（平成24年度特別展図録）（歴史民俗資料館）
6. 現代語訳 日本書紀（河出書房）
7. 四條畷市歴史民俗資料館 公式ホームページ

中世

1. 河内飯盛城パンフレット（摂河泉地域文化研究所）
2. シンポジウム飯盛山城と戦国時代の河内（摂河泉地域文化研究所）
3. シンポジウム飯盛山城と文人三好長慶（摂河泉地域文化研究所）
4. シンポジウム飯盛山城と河内キリシタン（摂河泉地域文化研究所）
5. 大阪春秋 特集 飯盛山城と戦国大阪（新風書房）
6. 歴史街道「日本の統治者」と呼ばれた三好長慶の実像（PHP出版）
7. 飯盛山城遺跡測量報告書（大東市教育委員会）
8. 飯盛山城縄張り測量図（大東市教育委員会）
9. 今谷明, 天野忠幸(編)三好長慶（宮帯出版）
10. 近世の三箇キリシタン（だいとう学テキスト（大東市教育委員会））
11. 野崎専応寺（平成26年度特別展図録）（歴史民俗資料館）
12. 大東市域の昔話と昔の暮らし（だいとう学テキスト（大東市教育委員会））
13. 奈良長谷寺公式ホームページ
14. 徳島鳴門長谷寺公式ホームページ

近世

1. 大東市域の河川と水の利用（だいとう学テキスト（大東市教育委員会））
2. 大東のだんじり(平成25年度企画展図録)（歴史民俗資料館）
3. 大東市史 近現代編（大東市教育委員会）
4. だんじりを活かした地域共同事業 報告書（地域共同事業実行委員会）
5. 大東市文化財ガイドブック1 石の文化財（大東市教育委員会）
6. 大東市域の交通路と野崎まいり（だいとう学テキスト（大東市教育委員会））
7. 野崎まいりとお染久松(平成21年度特別展図録)（歴史民俗資料館）
8. 野崎観音福聚山慈眼寺 公式ホームページ
9. 環境省 環境用水の導入事例集23・御領用水
10. 大東市公式ホームページ だいとうの見どころ案内
11. City DO!ホームページ 大東市 おでかけガイド
12. 近世大東の新田開発（歴史民俗資料館）
13. 市民フォーラム「平野屋新田会所を国史跡に」資料（平野屋新田会所を考える会）
14. シンポジウム平野屋新田会所その歴史と意義を考える（大東市教育委員会）
15. 探訪平野屋新田会所跡（大東市教育委員会）
16. 平野屋新田会所跡-保存整備に伴う確認調査報告書-（大東市教育委員会）
17. 平野屋新田会所跡発掘調査概要（大東市教育委員会）
18. 平野屋新田会所跡確認調査概要報告書（大東市教育委員会）
19. 旧平野屋新田会所屋敷と建物（大東市教育委員会）

【写真提供（掲載順）】

大阪府教育委員会
四條畷市
福聚山慈眼寺
戸森山専應寺
奈良・長谷寺
徳島鳴門・長谷寺